

奈良県御所市

# 檜原遺跡Ⅱ

平成6年（1994年）

奈良女子大学蔵書



961007691001

御所市教育委員会

210.2

95

奈良県<sup>ごせし</sup>御所市

<sup>なら</sup>檜 <sup>ばら</sup>原 <sup>い</sup>遺 <sup>せき</sup>跡 II

平成6年（1994年）

96100769

御所市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、奈良県御所市大字檜原502ほか29筆で実施した、檜原（ならばら）遺跡第2次発掘調査報告書である。なお、檜原遺跡は、奈良県遺跡地図では、第3分冊の「16-B-143」に相当する。
2. 調査は幸町地区改良事業の一環としての宅地造成に伴うもので、平成6年2月2日着手、同年3月16日に終了した。
3. 現地調査は、御所市教育委員会 技術職員 木許 守が担当した。調査作業員として、地元有志8名の参加・協力があった。遺物整理・本書作成には、木許のほか、藤村藤子、尾上昌子、木村美幸、榎原静代、藤井浩子、戸村和子、中久美子、城本宏代、井戸川愛が参加した。また、現地調査および本書作成に際して、同会 技術職員 藤田和尊の協力を得た。
4. 製図は、遺物を藤村が担当し、その他を木許が担当した。
5. 本書の執筆・編集は木許が行った。なお、遺物観察表の調整の欄は木村が担当し、木許が補正した。また、胎土の欄の作成には藤田の協力があった。
6. 遺物観察表および文献註・補註は、本文末に一括して掲載した。
7. 出土遺物実測図の縮尺は $\frac{1}{2}$ に統一した。文中の遺物番号は、挿図・図版中の番号ともすべて統一した。
8. 本書で用いた「北」は、国土座標（第VI系）方眼北である。
9. 現地調査および本書作成に際しては、幸町地区改良事務所各位のご理解・ご協力をいただいた。記して深謝致します。

# 本文目次

第1章 位置と既往の調査 .....	1
1. 位置 .....	1
2. 既応の調査 .....	2
第2章 調査の契機と経過 .....	3
第3章 調査の成果 .....	5
1. 各トレンチの調査 .....	5
2. 出土遺物 .....	16
第4章 まとめ .....	24
出土遺物観察表1（古式土師器） .....	25
出土遺物観察表2（古式土師器以外の遺物） .....	30
文献註・補註 .....	37
報告書抄録 .....	38

## 挿図目次

第1図 檜原遺跡の位置 .....	1
第2図 調査地と周辺地形 .....	2
第3図 トレンチ配置図 .....	4
第4図 第1トレンチ土層断面図 .....	6
第5図 第1拡張区 平面図 .....	7
第6図 第1拡張区 土層断面図 .....	8
第7図 第1拡張区 溝等断面図 .....	8
第8図 第1トレンチ 暗渠平面図 .....	9
第9図 第2拡張区 平面図 .....	10
第10図 第2拡張区および河道 土層断面図 .....	11
第11図 第2トレンチ 土層断面図 .....	12
第12図 第3トレンチ 土層断面図 .....	13
第13図 第4トレンチ 土層断面図 .....	14
第14図 第4トレンチ 井戸断面略測図 .....	15
第15図 出土遺物 その1 .....	17
第16図 出土遺物 その2 .....	18
第17図 出土遺物 その3 .....	20
第18図 出土遺物 その4 .....	22

## 図版目次

図版1 調査地全景（南から） 調査地全景（真上から）	
図版2 第1拡張区・第2拡張区（真上から） 第1拡張区（西から）	
図版3 第2拡張区（北から） 第1トレンチ（西から）	
図版4 第2トレンチ（西から） 第3トレンチ（東から）	
図版5 第4トレンチ（東から） 第5トレンチ	
図版6 第4トレンチ 井戸（井桁） 第4トレンチ 井戸（井戸側）	
図版7 出土遺物 1	
図版8 出土遺物 2	
図版9 出土遺物 3	



# 第1章 位置と既往の調査

## 1. 位置

御所市は奈良盆地の東南部に位置する。西部には葛城山、金剛山などの峻峰が峙ち、南部には巨勢山丘陵などが、東部には国見山さらには高取山などがあり、市域の北側のみが盆地平野部（国中）の一角を占めている。

檜原遺跡は葛城山麓から東に伸びる尾根が、盆地平野部と接して途切れかかる傾斜面上に占地し、南を鎌田川、北を大字石川付近に源をもつ小河川によって画された扇状地上に立地している（第1図）。微視的にみれば、東西方向にさらに数条の谷筋が走り、遺構などは主として微尾根上に存在するものと目される。

遺跡の規模は南北、東西共におよそ400m程度と推定され、古墳時代前期以降の集落跡と位置付けられる。



第1図 檜原遺跡の位置（S.=1/50,000）

## 2. 既往の調査

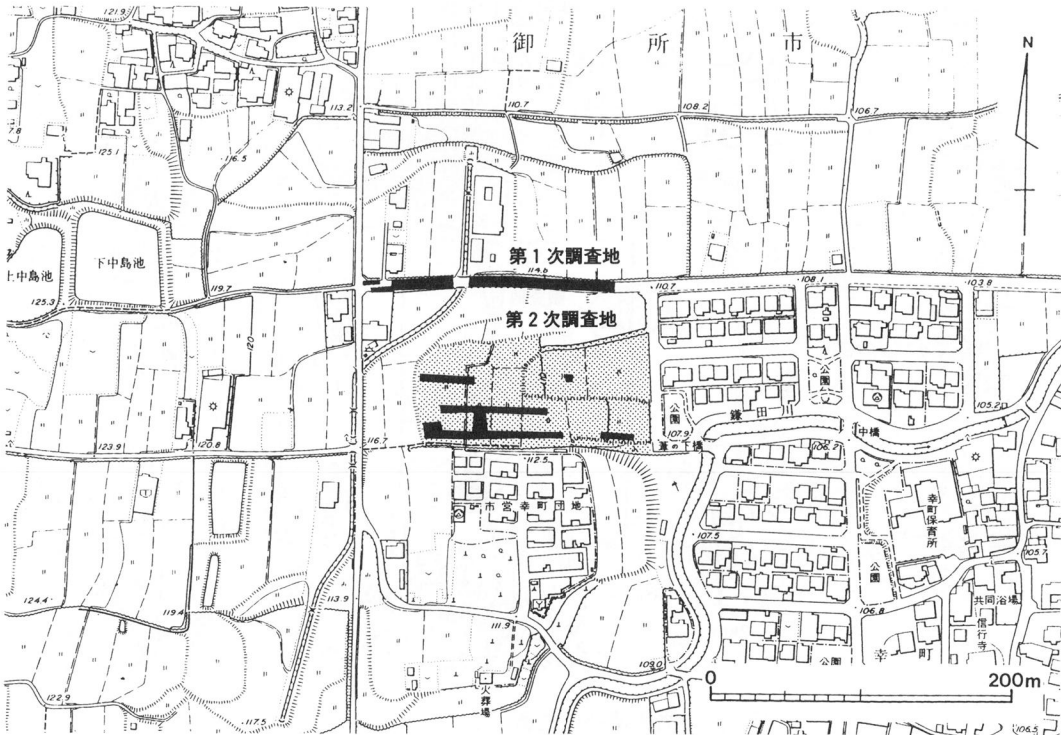
(1)

橿原遺跡の発掘調査は、今次調査に先立って昭和61年度に第1次調査が実施されている。

第1次調査地は、今次調査地の北側に存在する微尾根上に位置する（第2図）。幅約7m、延長約160mの範囲内で、面積約1,000㎡が発掘された。

当該調査では、調査区がE地区・W地区の2地区に分けられ、遺物包含層からは弥生時代第Ⅲ様式から近世に至る時期の土器が出土した。E地区では古墳時代前期と後期および中・近世の遺構が検出されている。またW地区では古墳時代前期の布留0式から2式の、それぞれの時期に属する溝や土坑などの遺構が検出されている。

出土遺物としては古墳時代前期の土器が豊富に出土し、それらが層位的に検出されたことと相俟って、今後南葛城地域の当該期の土器編年を考える際には、標識的な遺跡になるものと評価される。また、それらの土器の中に、北九州・吉備・河内（生駒山西麓）・紀伊・近江・伊勢湾沿岸・北陸・南関東の各地方からの搬入品が含まれていることが明らかになったことも、注目すべき成果であった。



第2図 調査地と周辺地形（S.=1/5,000）

## 第2章 調査の契機と経過

平成5年10月21日、芳本甚二 御所市長から、御所市大字檜原502ほか29筆について、文化財保護法第57条の3に基づく発掘の通知が提出された。工事の目的は、小集落改良事業に伴う宅地造成である。当該地は、檜原遺跡（『奈良県遺跡地図』第3分冊「16-B-143」）として周知されている。工事は盛り土工法がほとんどであるが、一部に切り土が計画され、また擁壁部分の基礎工事には掘削が伴うものであった。

当該地は、先述したように、東西方向に伸びる微尾根上に立地する第1次調査地の南側に位置し、現状の地形からも谷部分に相当するかに見える。そのようなことから、本市教育委員会では、どのような状態で遺構等が存在しているかを確認するため、計画されている道路部分についてトレンチ調査を行い、その結果で本調査の実施を検討することにした。そして、このような主旨の意見書を付して、この発掘通知を奈良県教育委員会文化財保存課に進達した。併せて文化財保護法第98条の2に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。

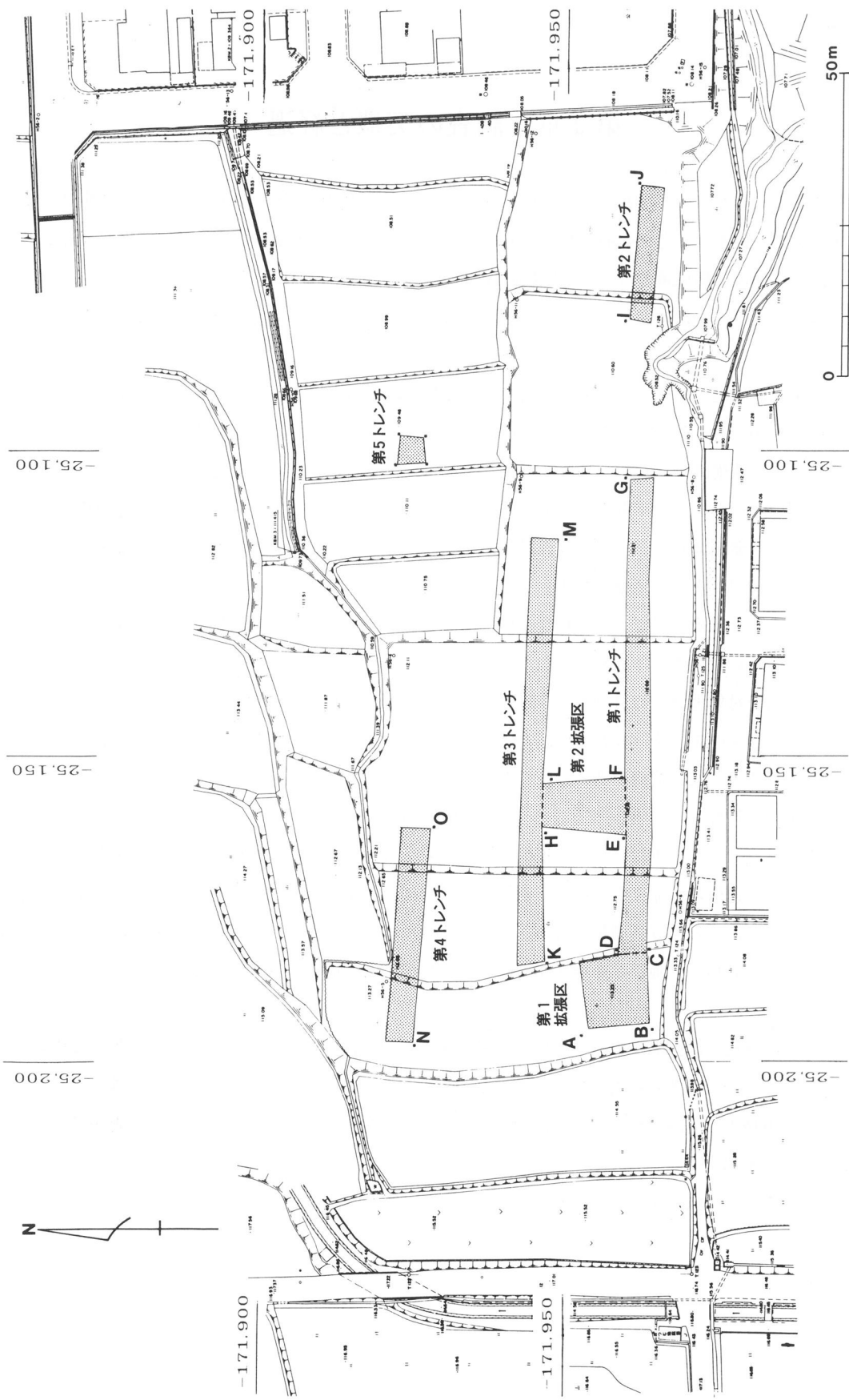
以上のような経緯を経て、本市教育委員会は平成5年12月28日、埋蔵文化財試掘調査にかかる受託契約を締結し、調査の体制を整えた。

当面の調査対象地は、約11,000㎡である。トレンチは、工事計画に合わせて、幅4～5m、長さ最大で90mのものを、合計5カ所に設定し、第1～5トレンチと呼称した。これらの調査の結果、第1トレンチの一部に遺構が認められたため、2カ所においてこの部分を拡張し、それぞれ第1・第2拡張区と呼称した（第3図）。トレンチの面積は合計約1,250㎡になった。

調査の方法は、まず重機によって掘削、適時人力を併用して地山面を検出し、その後人力によって精査および遺構埋土除去を行った。遺構など平面図は、第1拡張区および第2拡張区でラジコン・ヘリコプターによって写真測量を行い、10cm単位のコンターラインを入れた1/20の図面を作成した。また、当該地の立地などを検討するために、1/1,000の遺跡全体の平面図（別添図）を作成した。

なお、調査地の南西隅から西に抜ける道路の建設が現在計画されているが、この箇所は未買収地であるため、今回の調査対象にできなかった。調査期間中、本市教育委員会は、事業課である幸町地区改良事務所と協議を行い、この箇所について将来開発が行われる場合には発掘調査が必要であることを、確認した。

現地調査は、平成6年2月2日着手、同年3月16日に終了した。



第3図 トレンチ配置図 (S. = 1 / 1,000)

## 第3章 調査の成果

### 1. 各トレンチの調査

#### ①第1トレンチ・第1拡張区・第2拡張区（第4～10図）

第1トレンチは、調査区の南端部に設定した。当初、幅4.5m、長さ90mを掘削した。

調査の結果、西端部に溝1条を検出し、また、トレンチの西端から約30mの地点で河道状の遺構を検出した。そこで、西端部および河道部分のトレンチを拡張し、それぞれ第1拡張区・第2拡張区と呼称した。

第1トレンチの基本的な層序（第4図）は、現耕作土・床土下に赤褐色砂礫土（6層または8層）の堆積がみられ、さらに帯状に堆積する黒灰色粘土（7層）を挟んで地山に至る。地山は、暗青灰色粗砂（4層）である。

地山は全体に西から東に傾斜しており、西端の最も高い部分、すなわち第1拡張区においては、上述のような砂礫土・粘土の堆積はみられず、床土下に黒灰色粘土混じり砂の堆積（第6図－3層）があって地山に至る。この黒灰色粘土混じり砂は、後述するように、調査区全体に認められ、中世期の瓦器・土師器などをごく僅かに含有するものである。また、第1拡張区の北半は第6図に示したように、南端から約7.5mの地点で、地山が傾斜変換点をもって北方向に下がり、谷地形になる状況を確認した。このような状況であったので、北方向への拡張はこれ以上行なわなかったものである。なお、第1拡張区の東端部では、地山が約50cmの落差をもって段を成していた。この部分は、現在の地形においても、水田の境界部に相当し、段差をもっていることから、現水田の造成時に削平されたものと考えられる。

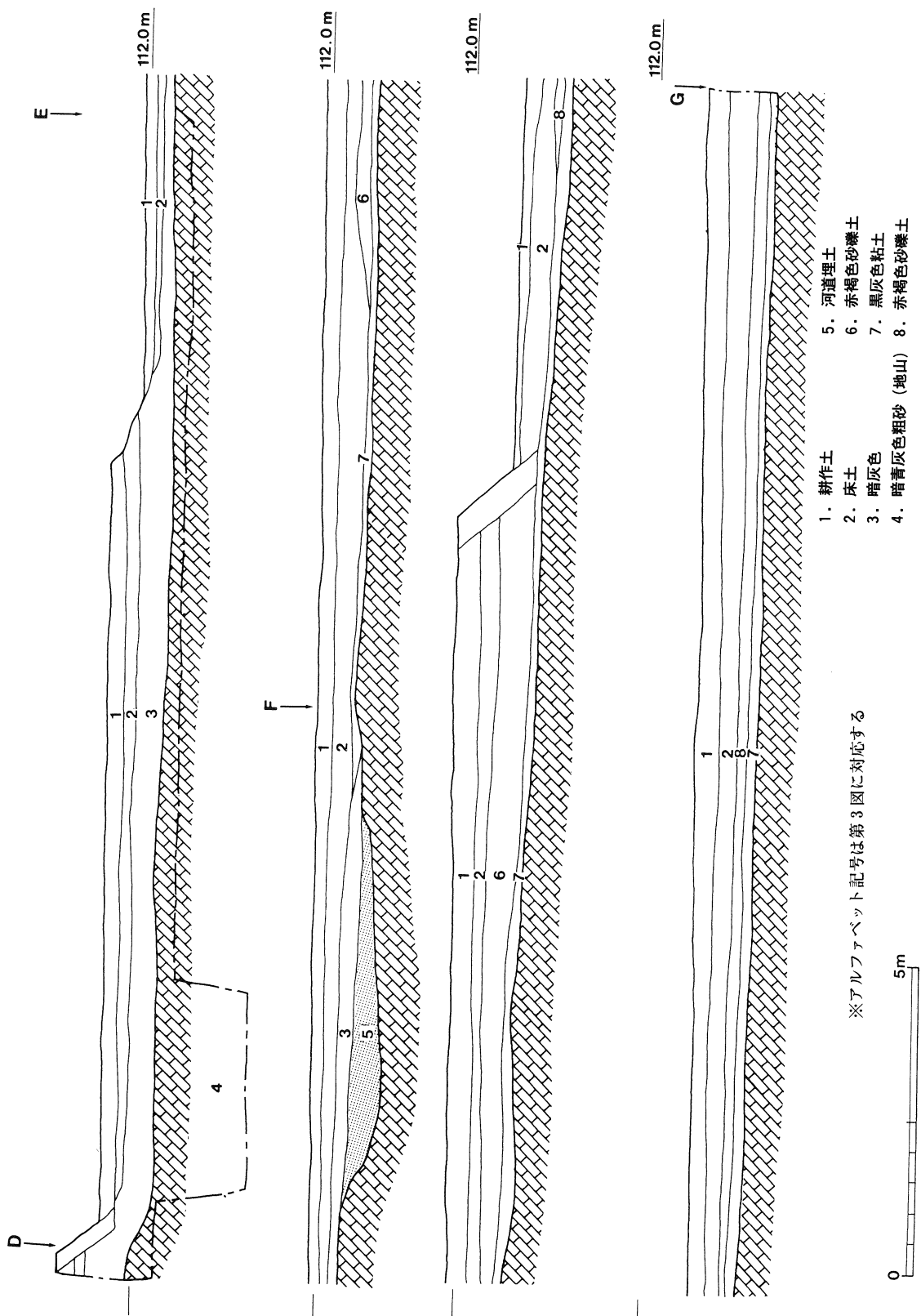
第2拡張区は、第1トレンチと第3トレンチの中間部分を掘ったもので、概ね南北方向のトレンチとなった。ここでは、地山が南から北に傾斜している状況が確認でき（第10図－1）、地山の直上には暗灰色砂礫土（3層）、黒灰色粘土混じり砂（4層）が堆積していた。

以上のトレンチにおいて、遺構は、現代の耕作にかかわる暗渠などのほかは、第1拡張区で溝1条、第1トレンチから第2拡張区にかけて河道を検出した。

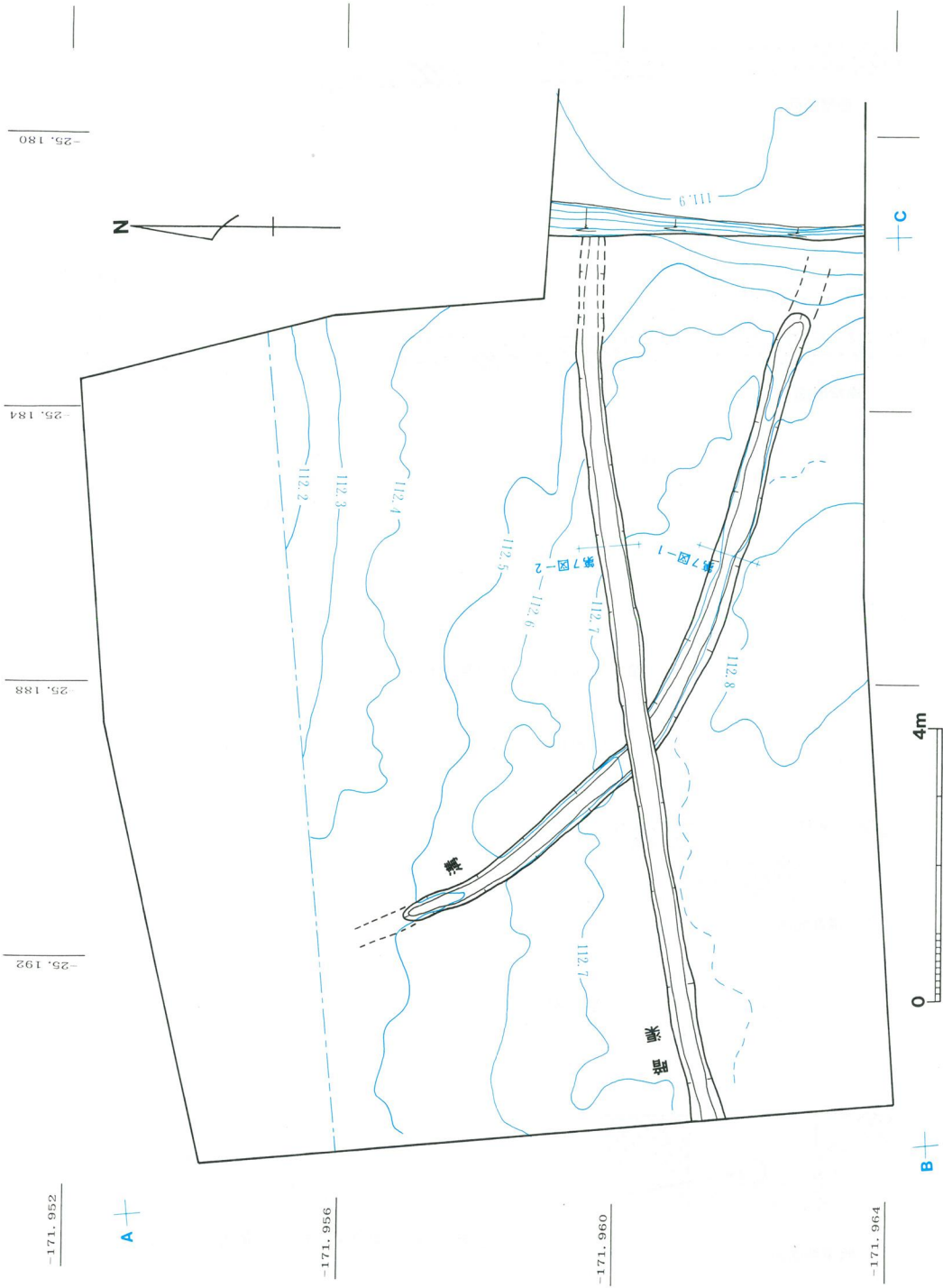
暗渠については、調査区の全体の至る所でみられたが、多くの場合、幅40cm程度、深さ30cm程度の素掘りの溝に、竹の節を抜いて筒状にしたものを埋設するという方法が採られていた（第7図－2）。そのような中で、第1トレンチにみられた暗渠は、人頭大よりやや小ぶりの石材を、片側に2列もしくは3列に並べ置いて、溝を形成するものであった（第8図）。出土遺物が無かったために、この遺構が他の暗渠に先行するものかどうか不明であるが、耕作床土直下にこの石組の上面がみられたことなど、層位的な検出状況が他の暗渠と同様であったので、大きく時期を逆上るものではないと考える。

さて、第1拡張区では上記のような暗渠を除けば、地山上面で溝1条を検出した（第5図）。溝

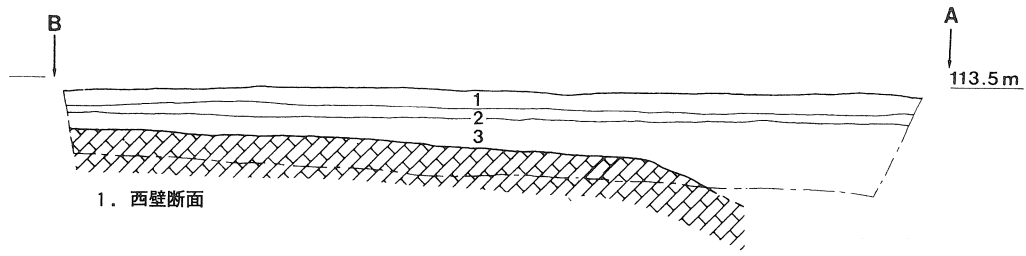




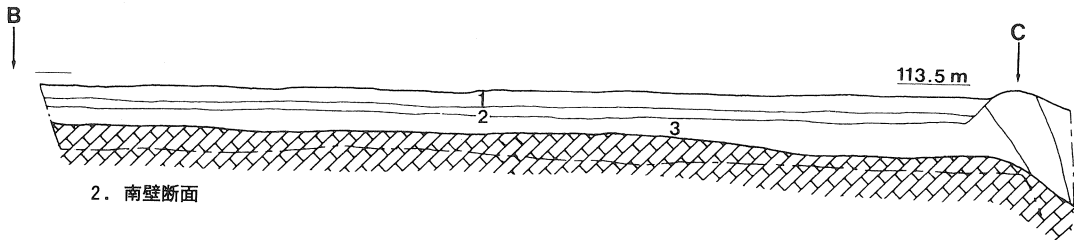
第4図 第1トレンチ土層断面図 (S. = 1/100)



第5図 第1擴張区 平面図 (S.1/100)



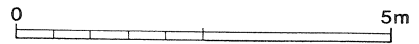
1. 西壁断面



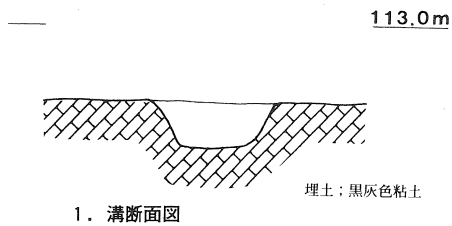
2. 南壁断面

※アルファベット記号は  
第3・5図に対応する

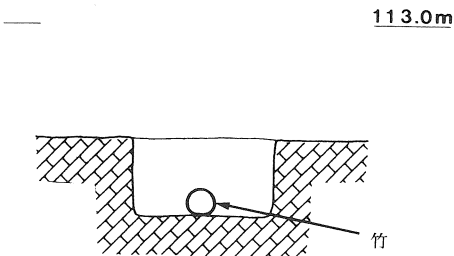
- 1. 耕作土
- 2. 床土
- 3. 黒褐色粘土混じり砂



第6図 第1拡張区 土層断面図 (S.=1/100)

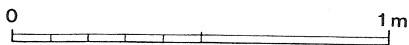


1. 溝断面図



2. 暗渠断面図

第7図 第1拡張区 溝等断面図 (S.=1/20)





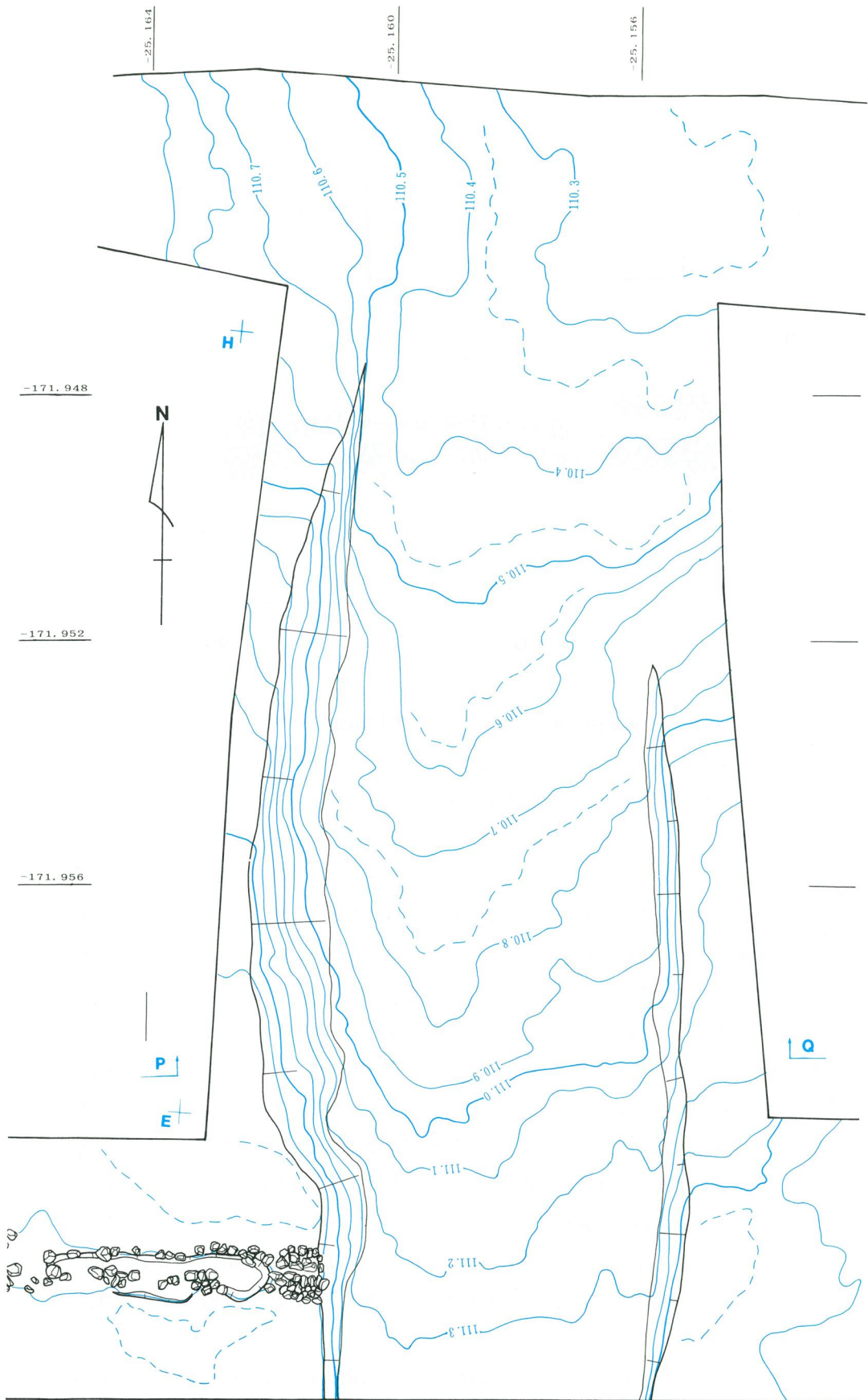
第8図 第1トレンチ 暗梁平面図 (S.=1/80)

は幅約30cm、深さ10cm程度を測り、長さ約11mを検出した。第1拡張区の南東部から弧を描きながら北方向に流れる小溝である。北端部分は谷に注ぐため次第に深さを減じてなくなるものと思われるが、南東部は、上面を上記のような削平を受けている。出土遺物は、土師器の細片が数点あったのみであるが、土師器小皿1点を図示した(第16図-19)。底部および口縁部の形態から、11世紀後葉から15世紀後葉まで存続するものと思われるが、当該期の資料が豊富でない現状では細別時期の確定は困難である。遺構の形成時期については、出土遺物が少なく、また周囲に存在するであろうと予想される他の遺構との関連が不明な現段階では、大きく中世期とせざるを得ない。

第1トレンチから第2拡張区にかけては、幅3m程度、深さ最大で80cm程度の南北方向の河道状の遺構を検出した(第9図)。この遺構は、第3トレンチにおいては落ち肩が認められず、つまり第2拡張区内でその深さを減じて、やがてなくなってしまうものである。また検出箇所南端部分での深さは20~30cmであった。これは、この部分周辺が後世の削平を受けているためと思われる。図示したように、遺構の底は南から北に低くなっており、その比高は1.0~1.1m程度になる。南接する微尾根から谷筋に向けて流れていた河道であると考えられる。

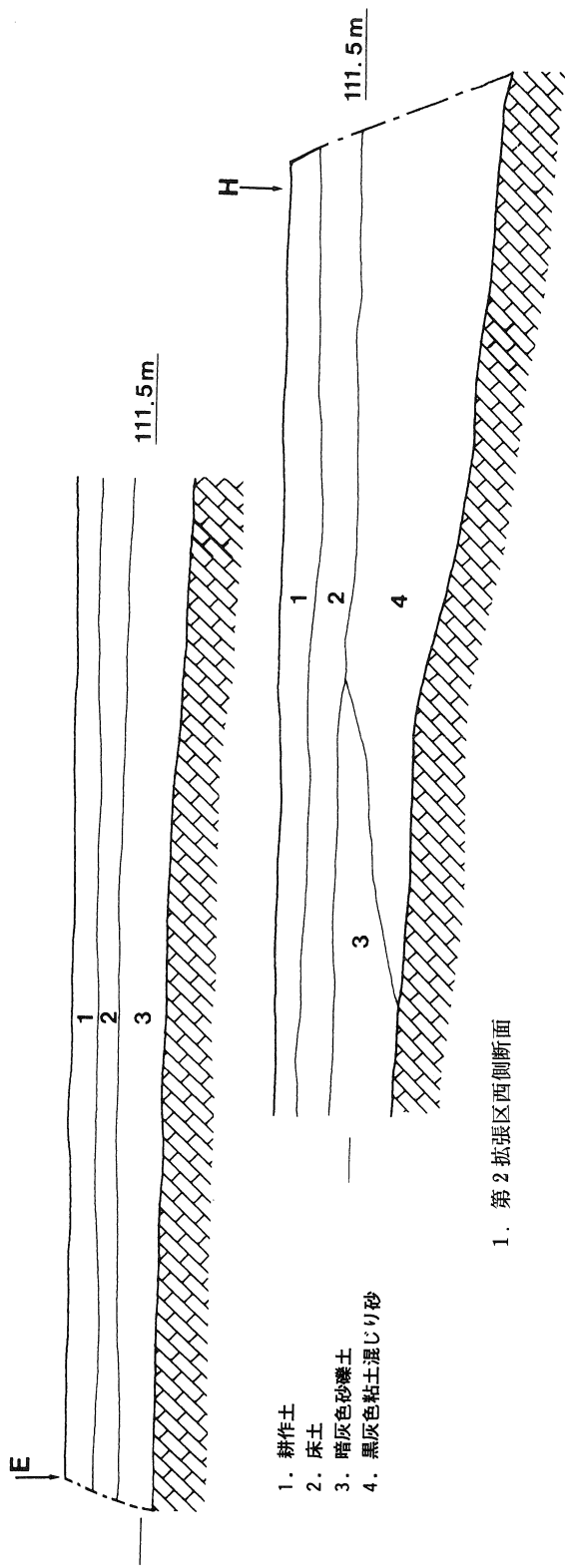
遺物は、下層に相当する第3~5層(第10図-2)からは、土師器細片が僅かに出土したのみであったが、第2層で布留1~2式の土器を検出した。埋土中に、瓦器・陶器などを含まないことから、遺構は当該期までに埋没しているものと考えられる。

また上記のトレンチでのその他の出土遺物は、第1拡張区第3層(第6図)から瓦器碗、土師器

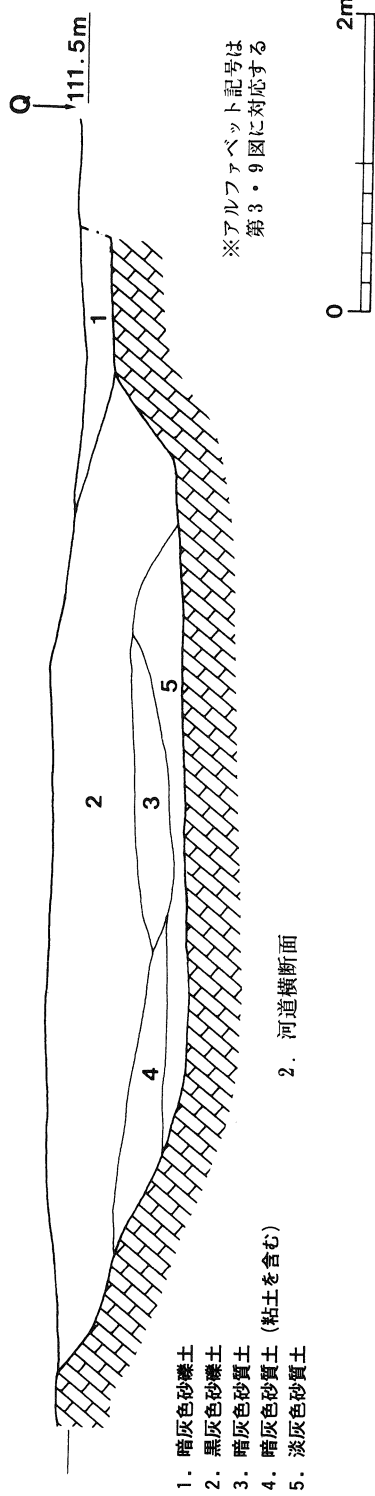


第9図 第2拡張区 平面図 (S. = 1/100)





1. 第2拡張区西側断面



2. 河道横断面

第10図 第2拡張区および河道 土層断面図 (S.1/50)

小皿、陶器播鉢などが出土したほか、同層は、古墳時代の遺物をごく僅かに含んでいた。その中で、特に円筒埴輪片が1点のみであるが、存在したことは注意される（第15・16図3～18）。

第2拡張区では、第3層（第10図-1）から微量が出土している。図示し得たもの（第16図20～23）以外では、古墳時代須恵器片・同土師器片・瓦器片が若干あった。

②第2トレンチ

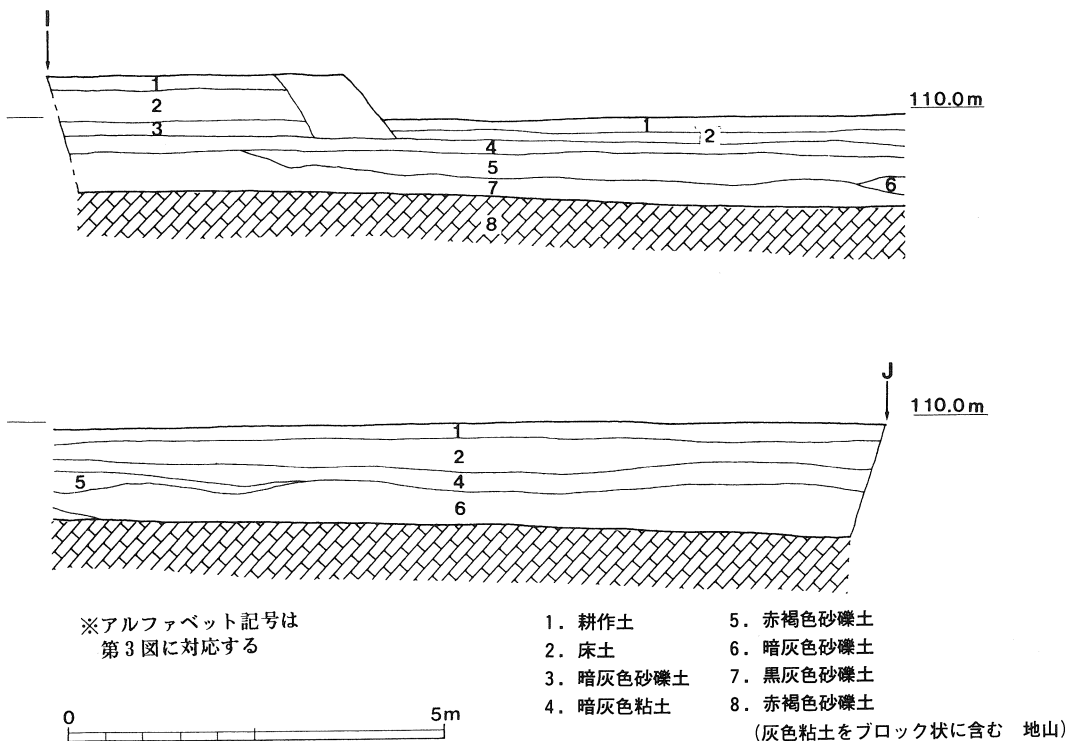
第1トレンチの東に、幅3.5m・長さ23mを設定、掘削したトレンチである。

基本的な層序(第11図)は、第1トレンチと同様であり、地山の標高が、第1トレンチよりさらに低くなっていることを確認した。遺構は認められず、遺物の出土もなかった。

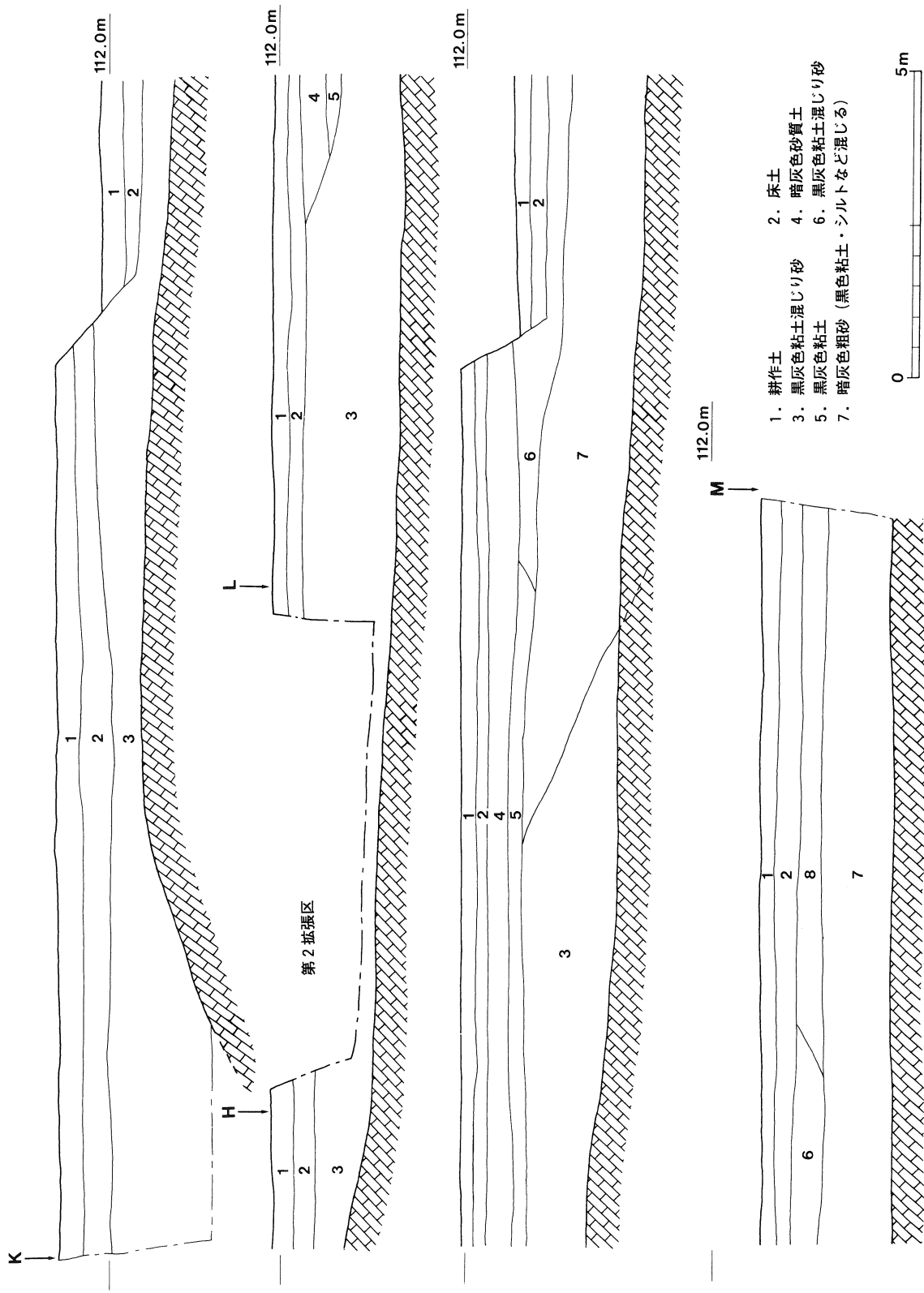
③第3トレンチ

調査地のほぼ中央に幅4.5m、長さ80mを設定、掘削したトレンチである。

基本的な層序は、地山上に、黒灰色粘土混じり砂や、粘土やシルトが混じる暗灰色粗砂が厚く堆積するものである。地山は西から東に傾斜し、現地表面から地山面までは深く、3m近くにまで達する箇所があった。遺構は認められなかった。遺物は、量的にも少なくかつ細片化しているものが大部分であったが、第3層（第12図）から出土した瓦器椀1点が図化できた（第18図-41）。



第11図 第2トレンチ 土層断面図 (S. = 1/100)



※アルファベット記号は第3図に対応する

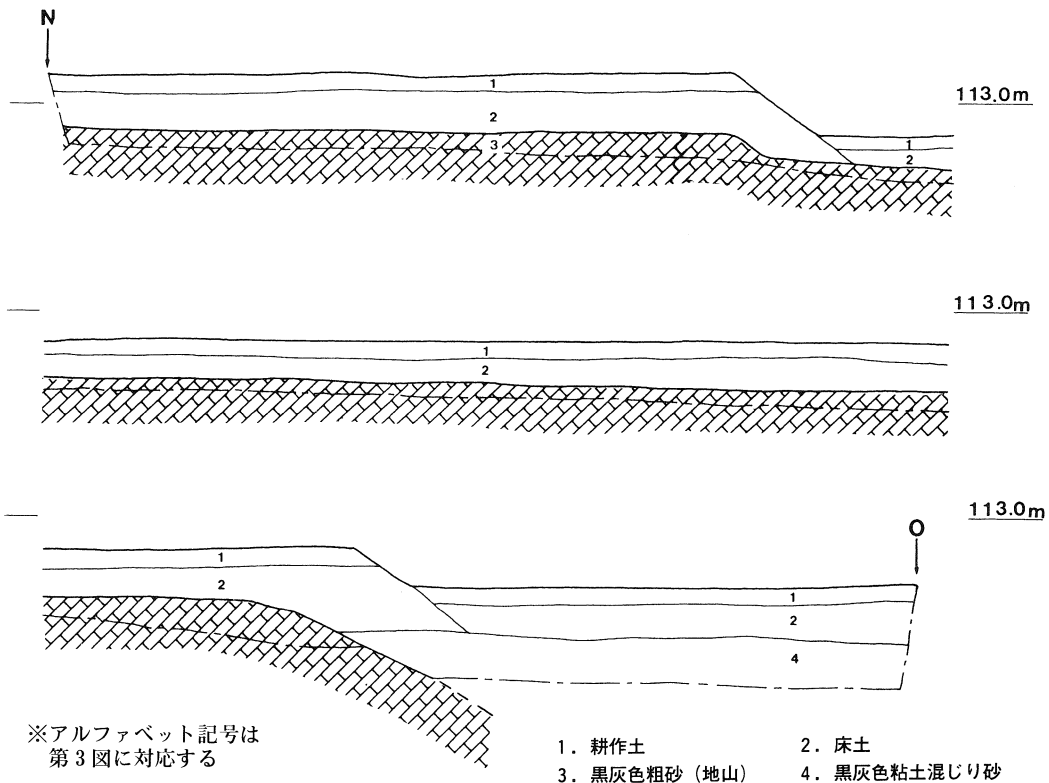
第12図 第3トレンチ 土層断面図 (S. 1/100)

④第4トレンチ

調査地の北寄りに設定したトレンチである。幅4.8m、長さ35mを掘削した。

床土直下に地山である黒灰色粗砂を検出した。トレンチの東端近くでこの地山が急な傾斜変換点をもって下がっていく状況を確認したが、この部分には第3トレンチでみられものと同様の黒灰色粘土混じり砂が堆積していた。

このトレンチの西端から約23mの地点で、木組みの井戸を検出した。井戸側の取水部分での平面形は、東西1.5m、南北1.1の東西にやや長い長方形であるが、後述するように、地表から約80cmの地点から内部が北に広くなり、東西1.5m、南北1.8mの南北に長い長方形をなす。深さ2.5mを測るものであるが、検出時、埋土は底から約50cm程度しか入っておらず、水を満々とたたえている状況であった。井戸の上面に径20cm程度の丸太を数本のせて蓋とし、その上に現耕作床土を置いていたものである。検出時の以上のような状況、および、この種の井戸を戦中または戦後間もないころに掘ったことがあるとの地元の人の話から、この井戸は近・現代の耕作にかかわる施設であると考

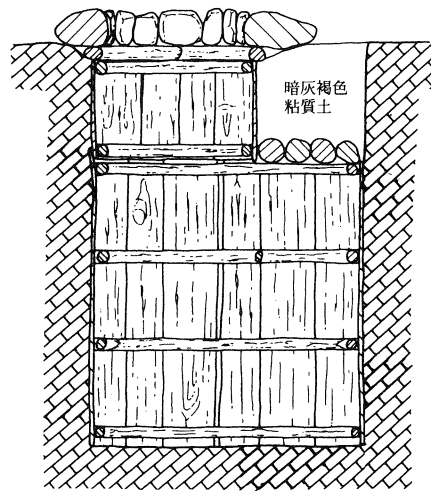


第13図 第4トレンチ 土層断面図 (S. = 1 / 100)

えられる。

井戸の構造について、第14図に断面図を掲げた。井戸側の差異に注目された宇野隆夫氏の<sup>(2)</sup>分類によれば、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸に相当するものと思われる。

この井戸には井戸側とする板材を埋設するための掘りかたが存在しなかった。したがって、井戸側の埋設に際しては、当初1.5m×1.8mの範囲の外周に板材を打ち込んでいき、続いてその内側の土を除去し、この作業が一定程度進んだ時点で再度側板を打ち込むという作業を繰り返しながら行ったものと想定される。以上の作業によって井戸の底が地表面から2.5mに達した時点で、下から一段目の板材を打ち込む作業を止め、横棧によって井戸側を保持する。この際、下から3段目の横棧



第14図 井戸断面略測図 (S. = 1 / 50)

の間には支柱を入れて井戸側をさらに補強している。この時点では、井戸側の長さが1.7mしかないので、地表面から側板上端までの約80cmは、井壁の土が見えていたはずである。そしてこの段階で、北半分の1.1m×0.7mについてのみ上面に丸太材を並べ置いて蓋をする。残りの南半分については、長さ約60cmの板材を用いて、最初に打ち込んだ板材に継ぎ足し、地表面近くまでの井戸側を形成する。この時、蓋をした北半部については土を埋め戻す。このような事をするのは、取水部分を小さくして安全性を高めかつ取水作業を容易にする一方で、その割りに貯水量を多く得るためであろうと考えられる。<sup>(3)</sup>さて、井戸造成作業の最終工程として井桁を造る。井桁は、直径1.5m以上の円形を描くように人頭大の花崗岩を組む。この際、井戸側の上端部の隣接する辺間に丸太材を渡して、この周囲に石材を置くことによって、これが井戸内部に崩落しないようにしていた。

第4トレンチでは、その他の遺構は認められなかった。遺物は、床土もしくは地山上面で、少量の土器片などが出土した。細片化しているため時期の特定が困難なものが多かったが、古墳時代のものは3片(須恵器甕2・同杯1)が認められたほかは、中世以降のものであった。図化し得た土師器小皿・瓦器釜・須恵器鉢(第18図42~46)のほか、土師器釜・平瓦片などがあつた。

#### ⑤第5トレンチ

第4トレンチの東方に、4.5m四方のトレンチを設定、掘削した。

床土下に厚み2.0m以上の黒灰色粘土混じり砂の堆積を確認した。



## 2. 出土遺物

今次調査では出土遺物が少なかったが、可能な限り実測図を作成し、46個体を掲載した。

出土遺物は、古式土師器と中世土器・瓦器に大別され、そのほかに円筒埴輪片が1点あった。以下に、それらについて報告するが、古式土師器の形式分類等については、寺沢薫編『矢部遺跡<sup>(4)</sup>』に、中世土器・瓦器の型式分類等については、松本洋明編『十六面・薬王子遺跡<sup>(5)</sup>』にそれぞれ準拠した。

また、胎土の観察については、『矢部遺跡』で採られた方法を援用した。これは、『檜原遺跡Ⅰ<sup>(6)</sup>』においても、同様の方法が採用されており、同一の基準で一定地域の土器胎土を観察することにより当該地域の「胎土類型」が確立され、あるいは出土遺物が少ない場合にはそれを援用でき、さらにその範囲を拡大していけば比較検討も可能になり得るとの意図によるものである。したがって、土器胎土の観察に際しては、『矢部遺跡』・『檜原遺跡Ⅰ』で使用された顕微鏡と同一機種であるナショナルライトスコープFF-393(×30)を使用した。

これらの観察結果の詳細は、出土遺物観察表(25～36ページ)に記したが、記述の都合上、古式土師器とその他の遺物を別の書式で表す必要があったため、前者と後者に分けて掲げた。

遺物の実測図は、 $\frac{1}{2}$ のスケールに統一して第15～18図に示した。この際、土師器および埴輪の断面は白抜きとし、須恵器および陶器は黒ぬり、瓦器は網掛けのトーンで示した。また、黒斑の範囲は薄いトーンで、煤および炭化物は濃いトーンで示している。

### ①各出土遺物の所属時期

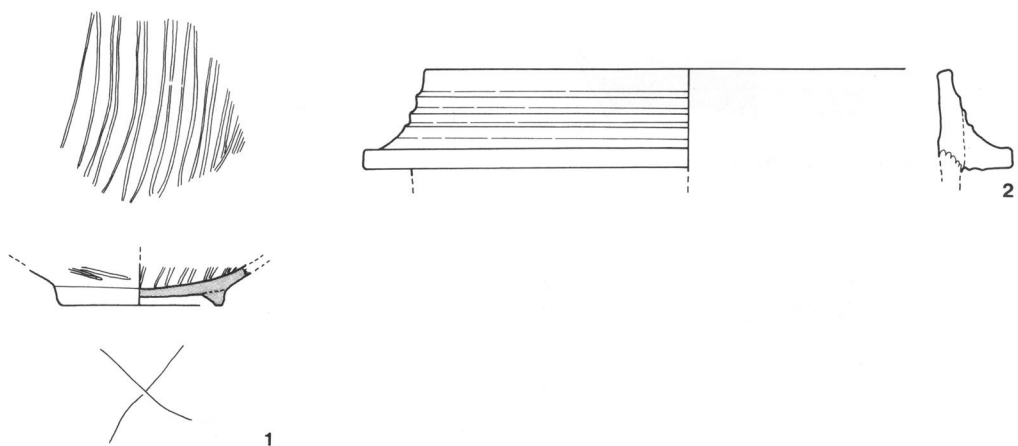
以下に、出土層位ごとに各遺物の所属時期について述べるが、特に断らない限り、形・型式分類の認定と同様、古式土師器については『矢部遺跡』に、中世土器・瓦器については『十六面・薬王子遺跡』に準拠する。

第1拡張区床土の遺物(第15図-1・2)は、瓦器椀と土師器釜の2点が図化できた。

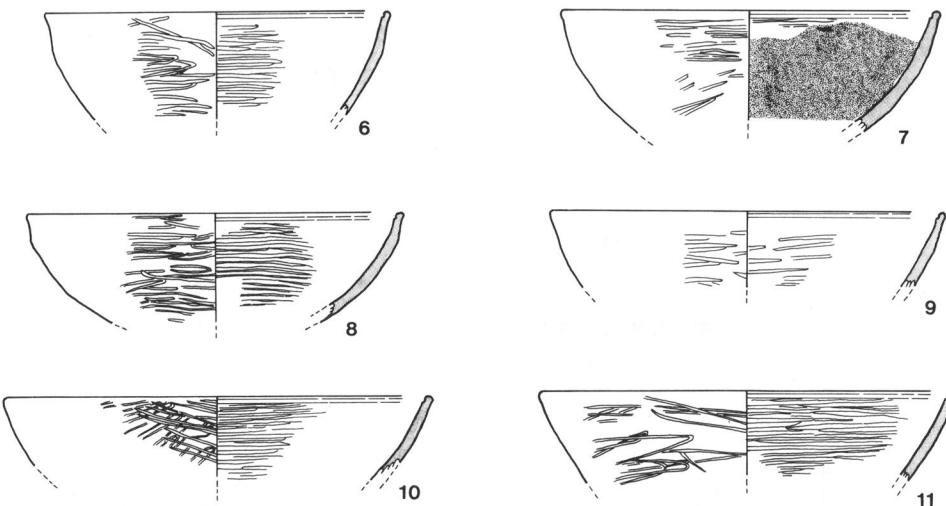
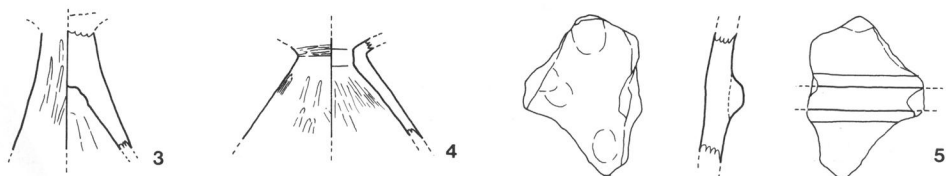
(1)は、瓦器椀底部の破片であるが、高台によって底部を中空仕上げとする椀底部Aを採用し、高台は外傾状に張り付けた厚みのある高台Aを用いる。また見込み部の暗文は平行線文とする。椀底部Aは、瓦器の初現期から13世紀前葉～中葉の資料まで見られ、特に12世紀中葉以降は、高台の中空が小さくなる傾向が強くなる。当該資料は、初現期のものに比べると中空が小さくなる傾向があるが、12世紀中葉以降のもの程には至っていない。また、見込み部の平行線文は12世紀前葉までに認められるものであり、当該資料は、西暦12世紀前後期に位置付けられるものであろう。

(2)は、直口A型の土師器釜である。直口A型は、14世紀に出現し17世紀以降まで存続する。大和では出土頻度の低い形式であり、細分した時期比定は困難である。

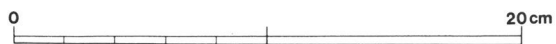
第15・16図(3)～(18)は、第1拡張区3層から出土した遺物である。古式土師器2点・円筒埴輪片1点・瓦器椀11点・土師器小皿1点・陶器播鉢1点を図示した。



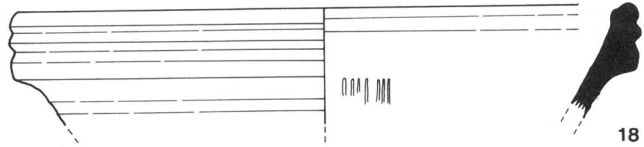
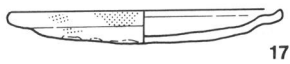
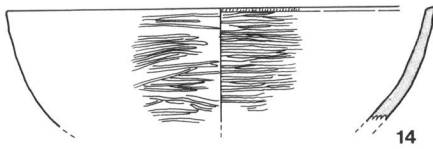
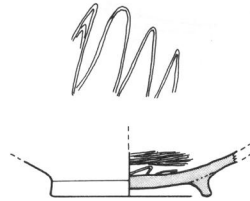
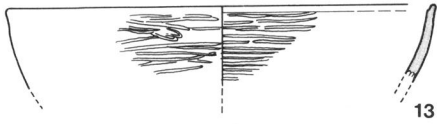
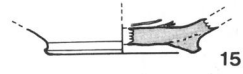
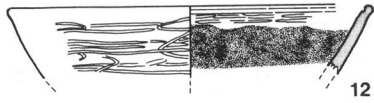
第1 拡張区 床土



第1 拡張区 3層



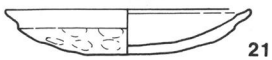
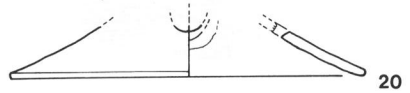
第15図 出土遺物 その1 (S. = 1 / 3)



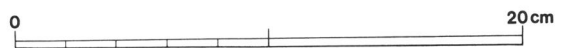
第1 拡張区 3層



第1 拡張区 溝埋土



第2 拡張区 3層



第16図 出土遺物 その2 (S. = 1 / 3)

(3)は、高杯脚部のみで、時期の特定はし難い。(4)は、小形器台脚部である。I-C<sub>2</sub>かC<sub>3</sub>の認定ができないが、C<sub>2</sub>の場合は庄内1式から布留0式まで、C<sub>3</sub>の場合は庄内3式から布留0式に認められる形式であり、いずれにせよ布留0式までに位置付けられるものである。

(5)は、円筒埴輪片である。内外面とも器壁の摩滅が著しく、外面の調整手法なども不明である。ただ、タガの断面形態から川西編年Ⅳ期<sup>(7)</sup>に相当するものであろう。

(6)～(16)は、瓦器椀である。底部の形態が判るものは(15)・(16)であるが、いずれも高台によって底部を中空仕上げとする椀底部Aである。高台は、それぞれ、外湾状に開いた高台B・外傾状に張り付けた厚みのある高台Aとする。高台A・Bは共に瓦器椀の初現期から12世紀中葉期までの資料にみられるが、底部の中空仕上げの状態が(1)と同様であることから、(15)・(16)についても、西暦12世紀前後期ものと考えられる。

次に、口縁部の形態が判る(6)～(14)のうち、(13)・(14)以外は、すべて口縁部の内面に1条の沈線を施した椀口縁Cである。椀口縁Cは、瓦器椀の初現期から12世紀中葉期まで認められる。

(6)～(12)は、いずれも内面のヘラミガキがやや粗い点など新しい要素があり、概ね12世紀前半代の、十六面・薬王子遺跡井戸03青粘期から土坑01下層期に併行するものと思われる。

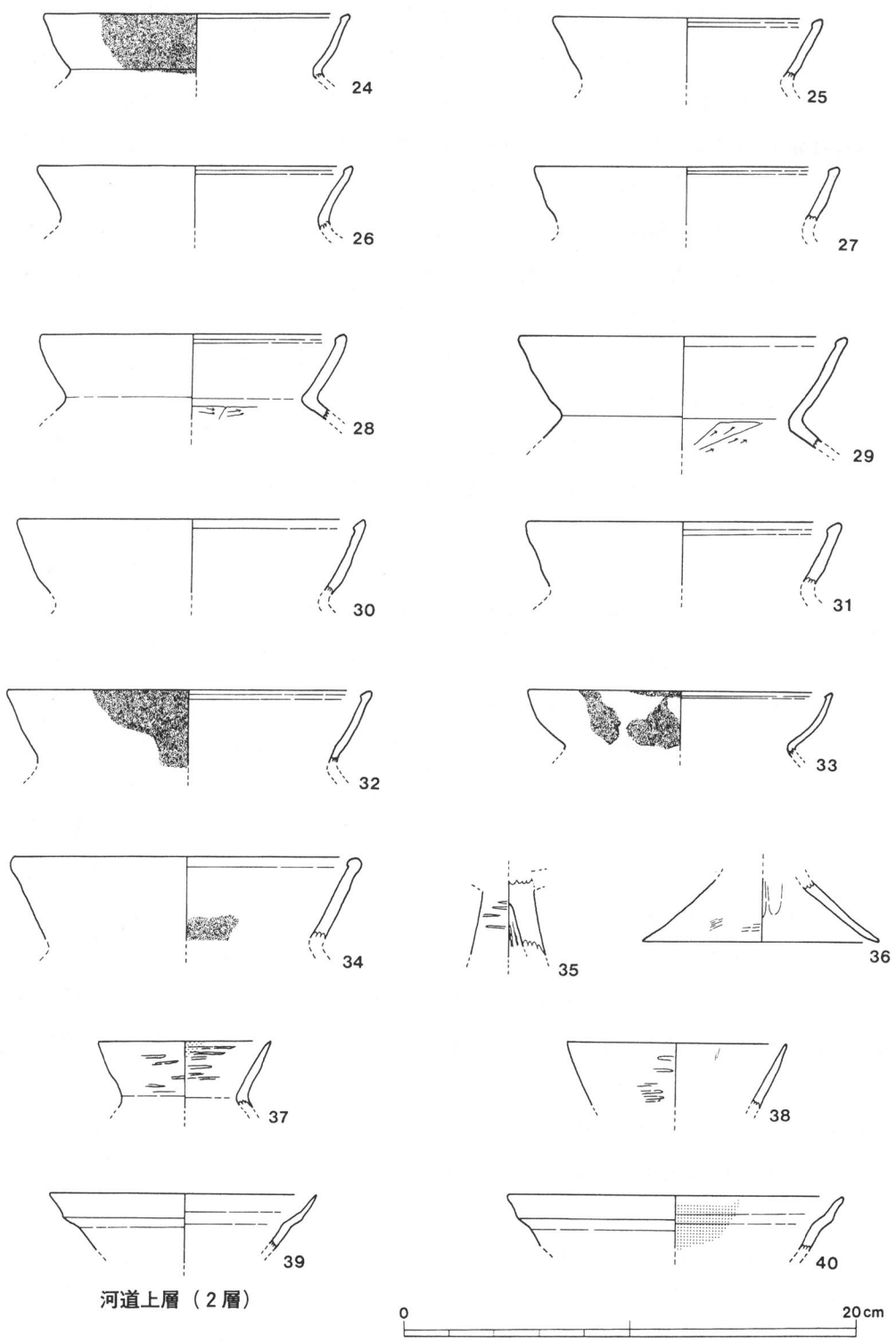
(13)は、口縁部に沈線を施した椀口縁Dを用いる。椀口縁Dは12世紀初頭から13世紀中葉までの瓦器椀にみられる。(14)は、口縁部に沈線を施さず、口縁端部を内側傾斜に面取り成形した椀口縁Bである。椀口縁Bは通常14世紀以降の「湯呑形瓦器椀」に使われる口縁形態であって、「瓦器椀」には珍しい。さらに(14)は口縁端部をハケ状工具で形成した痕跡が残っており、製作技法の上からも特殊な感を受ける。後述するように、(14)は胎土観察の結果から、他の多くの瓦器とは異なり在地で生産された可能性があり、そのことが「特殊」な口縁形態の原因かも知れない。所属時期については、出土包含層が、古式土師器や後述する陶器播鉢を含んでいる点で単純層といえないので不明であるが、前記した瓦器椀と同時期である可能性が高い。

(17)はいわゆる「て」字状口縁を呈する小形土師皿Aである。松本洋明氏は、小形土師皿Aは、黒色土器が盛行する段階からあり、11世紀後葉に位置付けられる井戸39上層期が終焉期であるとされる。また、主として大和北部の中近世土器の検討をした森下恵介・立石堅志氏によれば、12世紀前葉を含む奈良Ⅱ-B期にこの種の小皿が増加するが、次の奈良Ⅱ-C期にはみられないとされる<sup>(8)</sup>。つまり、西暦12世紀前後期に消長するものと思われ、(17)については、11世紀代から12世紀前葉期のものであろう。

(18)は、陶器播鉢である。大和においては、この種の播鉢の編年研究が立ち遅れている。17世紀以降のものであろう。

第1拡張区溝1埋土中から出土した遺物は1点のみ図化できた(第16図-19)。

(19)は、口縁部が内湾状に丸みをもって立ち上がる小形土師皿Bである。小形土師皿Bは11世



第17図 出土遺物 その3 (S.1/3)



紀後葉から15世紀後葉まで存続するとされる。ただ、(19)は口径が9cmとやや小ぶりであることから、その後半期に相当するものと思われる。

第2拡張区3層出土遺物は、古式土師器1点・土師器皿3点を図示した(第16図-20~23)。

(20)は、高杯脚部である。脚部のみの資料であるため、細別時期の特定はし難い。

(21)は、小形土師皿Aである。小形土師皿Aの所属時期は上述の通りであるが、(21)は口径の割に器高が高い感を受ける形態のものである。11世紀代のものであろうか。(22)は、口縁部が外傾状の直線的な立ち上がりをもつ小形土師皿Cである。(23)は、小形土師皿Bである。小形土師皿C・Bは、11世紀後葉の十六面・葉王子遺跡井戸39上層期から15世紀後葉の溝24期まで、長期間にわたってみられる。ただ、(22)は口縁端部を上方へ屈曲させて跳ね上げ状にした皿口縁Iを用いる点で古い要素をもつといえよう。

第17図-24~40は、第2拡張区溝上層出土遺物である。

(24)~(34)は、甕口縁部である。(35)・(36)は高杯脚部、(37)・(38)は小形丸底壺口縁部、(39)・(40)は小形丸底鉢である。

高杯脚部・小形丸底壺は細別時期を特定することは困難であるが、甕は、(33)・(34)を除いてすべて口縁 $g_3$ 手法の口縁形態を採る。 $g_3$ 手法は、布留0から布留式4式に至るまで認められる。しかし、『橿原遺跡I』での出土遺物の分析結果をみると、橿原遺跡では布留0式には $g$ 手法が認められないことから、これらの甕の上限は布留1式であると考えられる。また、同じく『橿原遺跡I』の成果から遺跡の盛行期自体が布留2式までと考えられていることから、下限を当該期と見なす。つまり、(24)~(32)の所属時期は布留1~2式に収まるものと考えられよう。

さて、(33)は $g_3$ 手法の口縁形態であり、(34)は『矢部遺跡』や『橿原遺跡I』で示された範疇には属さない特殊なものである。 $g_3$ 手法は布留2式には主体を占めるとされるが、『橿原遺跡I』においてもこの口縁形態の甕は極端に少なく、一括資料中においては、布留2式の土坑2に搬入土器の1点がみられるだけであった。後述するように、(33)も搬入土器であり、出土点数が少ないという状況も同じであって、橿原遺跡における $g_3$ 手法の一般的傾向といえる。(34)は、口縁端部を内側に丸く肥厚させたもので、腫れぼったい感を受ける。胎土観察の結果から、在地産のものと考えられる。(33)・(34)は、第1次調査の成果を踏まえても同形式の他の個体が極端に少ないか未検出である現状であり、時期の比定はできないが、他の多くの甕と同時期である可能性が高い。

(39)・(40)は、小形丸底鉢である。それぞれ、Ⅲ-B<sub>1</sub>・Ⅲ-B<sub>2</sub>形式である。同形式は布留0~3式にみられるものであり、上の甕の所属時期を包括する。河道埋土出土遺物であって、厳密な意味での一括資料ではないが、布留1~2式に収まる可能性が高い。

第3トレンチ3層出土遺物は瓦器碗1点が図化できた(第18図-41)。

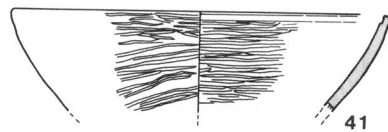
(41)は、碗口縁Cを用いる。ヘラミガキの状況など前述した第1拡張区3層出土のものと同様であり、ほぼ同時期とみられる。

第4トレンチ床土および地山直上で検出した遺物のうち、土師器小皿3点(第18図-42~44)・土師器釜1点(同45)・須恵器播鉢1点(46)が、図化できた。

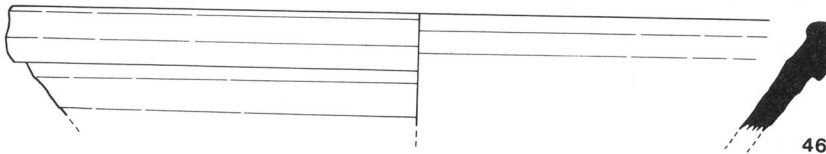
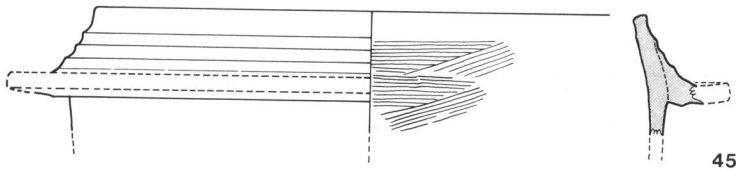
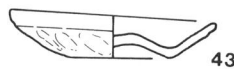
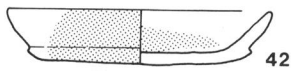
(42)は、口縁部が外傾して立ち上がり、口縁部と底部の境に稜を形成した小形土師皿Dである。十六面・薬王子遺跡では13世紀後葉に位置付けられる土坑10下層期から15世紀中葉~後葉の溝24期まで認められる。(43)のいわゆる「ヘソ皿」にあたる小形土師皿Eは、14世紀前葉の同遺跡土坑10上層期に出現し、17世紀前葉まで存在する。(44)の小形土師皿Cは前述のように、11世紀後葉から15世紀後葉まで存在する。床土出土資料であるため明確ではないが、(44)が(42)・(43)と同時期のものであれば、14世紀以降のものかもしれない。

(45)の直口A型の釜は、14世紀代に出現し、近世まで存続する。

(46)は、東播系播鉢である。布留遺跡西小路地区出土の中世土器を分析した毛利光用子氏は、東播系播鉢は「13世紀中ごろから14世紀代いっぱいまで使用され」、15世紀代からは瓦質播鉢に転換<sup>(9)</sup>するとされる。毛利光氏が提示された編年表によれば、(46)は14世紀後葉期のものに似る。



第3トレンチ 3層



第4トレンチ 床土



第18図 出土遺物 その4 (S. = 1/3)

## ②搬入土器・搬入品について

この節の冒頭に述べたように、『矢部遺跡』・『橿原遺跡Ⅰ』と同様の方法で、掲載した出土遺物すべてについて胎土観察を実施し、観察表に記した。<sup>(10)</sup>

藤田和尊氏は、『橿原遺跡Ⅰ』で、出土遺物218点の観察から、在地の土器の典型的な胎土は、「石英M-S・3~4、長石M-S・3、角閃石S・3、雲母S・2、チャートS・0~1」で、赤色斑粒については甕がS・0~1、それ以外の器種がM-S・1~2である」との結果を示された。また、橿原遺跡を含む当該地域の土器胎土についての従来の「共通の理解」として、「石英や長石は大きなものが多く含まれ、雲母もめだって大形、多量に含まれる。一方、角閃石やチャートは小さく、無いかもしくは少ない」という点を挙げられ、この「共通の理解」と橿原遺跡在地の土器胎土との顕著な差は、「角閃石がSサイズながら多量にみられること、雲母が小さく少ないことに集約される」との指摘をされた。<sup>(11)</sup>

以上の成果は、主として古式土師器の胎土観察による結果であるが、それ以前または以降の時期についても、粘土の採取地をことさらに遺跡周辺部以外に求めていると考えない限り、この基準を演繹できると考える。ただ、瓦器は、精良・緻密な粘土素地が多く、素地の選定段階で水箒調整をしている可能性が高い。このため、含有各鉱物の大きさは一般に小さくなり、含有量も少なくなると思われるので、搬入品の認定に際しては、各鉱物相互の含有量の比率を重視した。なお、瓦器については、器面での胎土観察が不可能であるので、破断面でこれを観察した。

本書では、このような成果に基づいて在地・搬入の認定を行い、搬入土器（品）である場合、観察表の備考欄にその旨を記入した。

以上の基準・観点から胎土観察を行った結果、古式土師器では、(3)・(20)・(29)・(33)・(39)の5個体が搬入土器と認められた。所属時期が布留1~2式にほぼ限定できる河道上層出土資料をみると、17個体中3個体が搬入土器であり、その内訳は甕2点、小形丸底鉢1点である。『橿原遺跡Ⅰ』では、布留0式と布留1式以降では、全体に占める搬入土器の割合は大差ないとされるが、搬入土器の中で、後者の方が甕の比率が下がることが指摘される一方、高杯や小形丸底鉢といった祭祀にかかる器種の比率の伸びが注目されている。<sup>(12)</sup> 今次調査においては、搬入土器の個体数が少なく、このような比率の検討はあまり意味をなさない。ただ、その数少ない搬入土器の中に小形丸底鉢が含まれていることと、前項で述べたように、唯一のg<sub>3</sub>手法による甕(33)が搬入土器であることに注目したい。

瓦器については、ほとんどの個体が搬入品とみられ、口縁部の形態が判るもので、唯一の例外が椀口縁Bを用いる(14)である。検出したすべての個体が遺物包含層出土の破片であり、個々の個体の細別時期比定が困難な状況から、これ以上の検討にはおのずから資料的制約がある。将来的には、胎土観察の結果とその個体の形態に何らかの相関関係を見いだすことができるかもしれない。

土師器皿は、(19)と(22)が在地産で他は搬入土器であるとみられる。在地産土器と搬入土器の差については、各土器の所属細別時期が明らかでない現状では時期差の検討はできない。形態については、搬入土器には小形土師器A・B・C・D・Eの各種があり、一概にいえないが口縁部内外面を比較的丁寧にヨコナデするものが多い。将来的に検討すべき問題と考える。

以上のほか、(5)の円筒埴輪・(18)の陶器播鉢・(46)の須恵器播鉢が搬入品・搬入土器と見なされた。円筒埴輪については、『橋原遺跡Ⅰ』においても埴輪片の出土が報告されているが、これも搬入品とされる。埴輪製作地の検討も今後の課題といえよう。

## 第4章 まとめ

今回の調査地は現況の地形から見ると、南北を、東西方向の尾根に挟まれた谷筋に相当する。この南北の尾根については、北側の尾根筋では、かつて第1次調査で、布留0～2式の各段階の遺構が検出されている。

一方、既述のように、今回調査地の地山は、西から東に傾斜し、かつ南北方向では中央部分が最も深いという状況がみられ、多くのトレンチでは遺構は存在しなかった。つまり、調査の結果からも今回調査地の大部分が、谷部分に相当することが認められ、この谷全体を覆うように、古墳時代・中世期の遺物を若干含む黒灰色粘土混じり砂が堆積していることが確認できた。

さて、検出された遺構のうち、河道は、調査地の南に存在する尾根筋から谷筋に向けて流れているものと理解できる。また、この河道は層的に上記の黒灰色粘土混じり砂の下層に存在していることを確認したので、布留式の段階では調査地近辺は現状よりも起伏に富んだ地形であったと想定できる。さらに同層に含まれる遺物は多くの場合細片であり、破断面の状況からもローリングを受けているものと思われる。同層に含まれる遺物の大部分が中世期のものであったが、第1拡張区では円筒埴輪片が1点含まれていた。このようなことから、中世段階には調査地の西方に当該期の遺跡が存在し、そこからの流入土が当該地に堆積したものと理解できるのであるが、埴輪をもつ古墳もまた存在した可能性がある。

以上のような全体的な地形にあって、第1拡張区は調査地では最も標高が高い地点に位置し、かつ南に存在する尾根筋に隣接する。この地点に溝1条が検出できたのである。つまり、今回調査区外である、南接する尾根上や西側の標高が高い地点には遺構が存在する可能性がある。

さて、今次調査の目的は、当該地にどのような状況で遺構が存在するかを確認して、本調査を実施するか否かの検討材料を得ることであった。今回開発予定地内においては、遺構が存在する可能性がある部分については、トレンチの拡張を行って調査を実施したので、今後の本調査については、必要がないものと判断する。ただし、調査地に隣接する西側・南側では遺構の広がりが見込め、今後の開発については、埋蔵文化財に対する十分な留意が必要である。

# 出土遺物観察表 1 (古式土師器)

挿 および 図 版 号	遺 構 層 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整  ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎					土 そ の 他	備 考		
						石 英	石 長	角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒			チ ャ ー ト	
15-3 図版 7	第 1 拡張区 3 層	脚 台 (高 杯)	4?-A-	<ul style="list-style-type: none"> <li>法量と調整</li> <li>・ 外面 ヨココナデ後、タテ方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。</li> <li>内面 指頭によるタテ方向のナデ後、ヨコナデ。上部は未調整。</li> </ul>	淡赤褐色	S	S	S	S	L	S	2	搬入土器 (雲母含まず、石 英やや少ない。)	
15-4 図版 7	第 1 拡張区 3 層	脚 台 (小型器台)	I-C <sub>3</sub> ?	<ul style="list-style-type: none"> <li>法量と調整</li> <li>・ 外面 ヨココナデ方向のヘラミガキ (幅1.5mm)。</li> <li>内面 ヨココナデ方向のナデ。</li> <li>・ 外面 タテ方向のヘラミガキ (幅2mm)。</li> <li>内面 上半部 ヘラケズリ後、ヨコナデ。</li> <li>下半部 タテ方向のハケ (5条/cm) 後、ヨココナデ。</li> </ul>	淡赤褐色	S	S	S	S	M	S	3	器面摩滅著しい。	
16-20 図版 8	第 2 拡張区 2 層	高 杯	E <sub>4</sub> -3-	<ul style="list-style-type: none"> <li>法量と調整</li> <li>・ 裾部径14.2cm (残存1/5からの回転復元)</li> <li>・ 外面 ヨココナデ。</li> <li>内面 ヨココナデ。径1.4cmの円形のスカシを穿つ。配置不明。</li> </ul>	乳白色	S	S	S	S	S	S	S	2	搬入土器 (雲母・長石・角 閃石少なく、チャ ートややめだつ。)
17-24 図版 8	河道上層 (2 層)	甕 布留形	・ - - 5 g <sub>2</sub>	<ul style="list-style-type: none"> <li>法量と調整</li> <li>・ 口径 13.2cm (残存1/10からの回転復元)</li> <li>・ 外面 ヨココナデ。煤附着。</li> <li>・ 内面 ヨココナデ。</li> </ul>	淡褐色	L	S	S	S	L	S	3		

(古式土師器)

図 挿 お よ び 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	土 胎						備 考		
								石	長 角 閃 石	雲 母	赤 色 斑 粒	チ ャ ー ト	そ の 他			
17-25 図版8	河道上層 (2層)		甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 12.0cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡赤褐色	L	M	S	S	M	1	S	2	
17-26 図版8	河道上層 (2層)		甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 13.8cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡赤褐色	㊦	M	S	S	S	1	S	0	
17-27 図版8	河道上層 (2層)		甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 13.4cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡褐色	㊦	M	S	S	S	1	S	0	
17-28 図版8	河道上層 (2層)		甕 布留形	・-・- 5 g <sub>2</sub>	口径 13.3cm (残存1/18からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコナデ。 内面 左廻りへのへラケズリ (工具は左 から右)。 ・	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡褐色	㊦	M	S	M	S	1	S	0	

17-29 図版8	河道上層 (2層)	甕 布留形	・ - ・ - 5 g <sub>2</sub>	口径 14.4cm (残存1/12からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 右上がりナナメ方向のヘラケズリ。	乳褐色	L   S 3 M   S 3 S 2	M   S 3 S 2	L   S 1	搬入土器 (長石少ない。石 英・角閃石・雲母 はL-Mの大形を かなり多く含む。 チャートや多い。)
17-30 図版8	河道上層 (2層)	甕 布留形	・ - ・ - 5 g <sub>2</sub>	口径 15.2cm (残存1/14からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 ヨコナデ。	淡褐色	M   S 3 S 3	S 2 S 0	S 2	
17-31 図版8	河道上層 (2層)	甕 布留形	・ - ・ - 5 g <sub>2</sub>	口径 13.7cm (残存1/16からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 ヨコナデ。	淡茶褐色	M   S 3 S 3	S 2 S 0	M 3	
17-32 図版8	河道上層 (2層)	甕 布留形	・ - ・ - 5 g <sub>2</sub>	口径 16.0cm (残存1/15からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ。煤付着。 ・ 内面 ヨコナデ。	淡茶褐色	M   S 3 S 3	S 3 S 0	L   S 0	

(古式土師器)

挿 および 図 版 番	図 構 遺 層 位	器 種	形 式	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎						備 考				
							石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	チ ャ ー ト	赤 色 斑 粒		土 の 他			
17-33 図版 8	河道上層 (2層)	甕 布留形	・-・- 5 g <sub>3</sub>	口径 13.4cm (残存1/9からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。煤付着。 ・内面 ヨコナデ。 ・ _____ ・ _____	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	乳褐色	L	S	M	S	S	S	0	2	2	0	搬入土器 (石英・長石やや 少なく、チャート ややめだつ。角閃 石M含み、やや多 い。)
17-34 図版 8	河道上層 (2層)	甕	・-・- 特殊	口径 15.2cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。炭化物付着。 ・ _____ ・ _____	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	乳褐色	M	S	M	S	S	S	1	0			
17-35 図版 9	河道上層 (2層)	脚 台 (高杯)	・-A-C	・ _____ ・ _____ ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.2mm)。 ・内面 遺存部 未調整、シボリ目残存。	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡褐色	S	M	S	S	S	S	0	2			
17-36 図版 9	河道上層 (2層)	脚 台 (高杯)	4 ? - - -	裾部径 10.6cm (残存1/7からの回転復元) ・ _____ ・ _____ ・外面 ハケ後、ヨコナデ。 ・内面 ヨコナデ。上半部は指頭による押圧。	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	淡赤褐色	M	L	M	S	S	S	0	2			



17-37 図版 9	河道上層 (2層)	小形丸底壺		口径 7.6cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。 内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。黒斑。 ・ ・	淡褐色	M — S 3	S 3 2 0	S 3 2 0	M — S 3	
17-38 図版 9	河道上層 (2層)	小形丸底壺		口径 9.6cm (残存1/18からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm) が かすかに残る。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡赤褐色	M — S 3	M — S 3	M — S 3	M — S 3	
17-39 図版 9	河道上層 (2層)	小形丸底鉢	Ⅲ-B <sub>1</sub> -a	口径 11.8cm (残存1/15からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡黄赤色	S 2	M — S 3	S 2 0 0	M — S 3	搬入土器 (雲母含まず、石 英・角閃石やや少 ない)。 器面摩滅著しい。
17-40 図版 9	河道上層 (2層)	小形丸底鉢	Ⅲ-B <sub>2</sub> -a	口径 14.8cm (残存1/14からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。黒斑。 ・ ・	淡褐色	M — S 3	M — S 3	M — S 3	S 3 2 0 1	

出土遺物観察表 2 (古式土師器以外の遺物)

挿 お 図 番	図 よ び 版 号	遺 層 位	構 位	器 種	口 縁 部	底 部	高 台	法 量 と 調 整	・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	色 調	胎				備 考
											石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	
15-1 図版7	第1拵張区 床土	瓦器碗	—	碗 底部 A	高台 A	高台部径 6.4cm ・ ・ ・外面 ヨコナデ、ヘラ記号 (+字) あり。 内面 平行線の暗文。	黒灰色	0	2	1	0	0	0	0	搬入品 (石英・雲母含まない。)
15-2 図版7	第1拵張区 床土	土師器 釜	直 口 A 型	—	口径 21.0cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、3条の凹線 (2条/cm) を施す。鏝を張りつけた後、ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・ ・	淡灰褐色	M	S	S	3	3	0	3	0	搬入土器 (雲母含まず、チャート多く含む。)
15-5 図版7	第1拵張区 3層	円筒 埴輪	IV 期	—	・外面 器面磨滅のためハケ調整など不明。 ・内面 指頭による押圧。 ・	淡赤褐色	M	L	M	S	S	S	M	S	搬入品 (角閃石Mを含み、雲母少ない。)
15-6 図版7	第1拵張区 3層	瓦器碗	碗 口 縁 C	—	口径 13.6cm (残存1/13からの回転復元) ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.9mm)。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1.9mm)。 ・ ・	黒灰色	0	1	1	2	0	0	0	0	搬入品 (石英含まず、長石・角閃石少ない。)

15-7 図版7	第1拡張区 3層	瓦器碗	碗 口 縁 C	口径 14.8cm ・外面 (残存1/10からの回転復元) ヨコナデ後、ヨコ方向のやや粗いヘ ラミガキ (幅1mm)。 ・内面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。炭 化物付着。	黒灰色	S S S 0 2 1 3 0 0	搬入品 (石英含まず、雲母 ややめだつ。)
15-8 図版7	第1拡張区 3層	瓦器碗	碗 口 縁 C	口径 14.6cm ・外面 (残存1/20からの回転復元) ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。 ・内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm)。 ・外面 指頭による押圧後、ヨコ方向のやや 粗いヘラミガキ (幅1mm)。 ・内面 ヨコ方向の密なヘラミガキ (幅1mm)。	黒灰色	S S S 0 1 1 2 0 0	搬入品 (石英含まず、長石 少ない。)
15-9 図版7	第1拡張区 3層	瓦器碗	碗 口 縁 C	口径 15.6cm ・外面 (残存1/16からの回転復元) ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ。 ・内面 ヨコナデ。 ・外面 ヨコ方向のヘラミガキ。 ・内面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm以下)。	黒灰色	M S 1 2 0 2 1 0	搬入品 (角閃石含まず、石 英少ない。 外面はいずれも磨滅 著しく、ヘラミガキ 単位等、判定困難。)
15-10 図版7	第1拡張区 3層	瓦器碗	碗 口 縁 C	口径 16.6cm ・外面 (残存1/12からの回転復元) ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm以下)。 ・内面 ヨコナデ後、ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm以下)。 ・外面 斜格子状のやや粗いヘラミガキ (幅1 mm以下)。 ・内面 ヨコ方向のヘラミガキ (幅1mm以下)。	黒灰色	S S S 1 2 1 1 0 0	搬入品 (石英・角閃石少 ない。)

(古式土師器以外の遺物)

挿 お よ び 図 版 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	口 縁 部	底 部	高 台	法 量 と 調 整	・ 口 頸 部 ・ 体 部 ・ 底 部 (脚 台 部)	色 調	胎						備 考
										石	長 角 閃 石	雲 母	チャ ート	赤 色 斑 粒	そ の 他	
15-11 図版7	第1 拡張区 3層	瓦器碗	瓦器碗	碗 口縁 C	-	-	口径 16.2cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、ヨコ方向の粗いヘラミ ガキ(幅1mm)。 内面 ヨコ方向の密なヘラミガキ(幅1mm)。 ・外面 指頭圧後、ヨコ方向の粗いヘラミガ キ(幅1mm)。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ。(幅1mm以下)。	・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	黒灰色	S	S	S	⑤			搬入品 (雲母ややめだつ。)
15-12 図版7	第1 拡張区 3層	瓦器碗	瓦器碗	碗 口縁 D	-	-	口径 14.0cm (残存1/16からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、やや粗いヘラミガキ (幅1mm)。 内面 ヨコナデ後、やや粗いヘラミガキ (幅1mm)。 ・外面 やや粗いヘラミガキ(幅1mm)。 内面 炭化物付着のため不明。		黒灰色	S	⑤					搬入品 (石英少ない。)
15-13 図版7	第1 拡張区 3層	瓦器碗	瓦器碗	碗 口縁 D	-	-	口径 16.8cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、やや粗いヘラミガキ (幅1mm)。 内面 ヨコナデ後、ヘラミガキ(幅1mm)。 ・外面 指頭による圧後、やや粗いヨコ方 向のヘラミガキ(幅1mm)。 内面 ヨコ方向のヘラミガキ(幅1mm)。		黒灰色	M	S	S	⑤			搬入品 (雲母ややめだつ。)
15-14 図版7	第1 拡張区 3層	瓦器碗	瓦器碗	碗 口縁 B	-	-	口径 16.8cm (残存1/16からの回転復元) ・外面 ヨコ方向の密なヘラミガキ(幅1mm)。 内面 ヨコ方向の密なヘラミガキ(幅1mm)。 口縁端面にハケ工具の痕跡が残る。 ・外面 指頭による圧後、ヨコ方向のやや 粗いヘラミガキ 内面 ヨコ方向の密なヘラミガキ。		黒灰色	M	S	S	⑤			

15-15 図版 7	第1拡張区 3層	瓦器碗	—	碗 底部 A	高台 B	高台部径 6.2cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 ・ 内面 ヨコナデ。 密なヘラミガキ後、平行線状の暗文か？	黒灰色	S S S 1 1 1 2 0 0	⑤				
15-16 図版 8	第1拡張区 3層	瓦器碗	—	碗 底部 A	高台 A	高台部径 6.4cm (残存3/5からの回転復元) ・ 外面 ・ 内面 ヨコナデ。ヘラ記号(十字)あり。 密なヨコ方向のヘラミガキ(幅2mm)。 見込み部は平行線状の暗文。	黒灰色	S S S 0 1 1 1 0 0	⑤				搬入品 (石英含まない。)
15-17 図版 8	第1拡張区 3層	小形 土師皿A	皿 口縁 I	皿 底部 A		口径 10.6cm (残存1/4からの回転復元) ・ 外面 ・ 内面 ヨコナデ。 指頭による押圧後、不定方向のナデ。 黒斑。 ヨコナデ。	乳褐色	S S S 2 2 3 3 3 1	S S S				搬入土器 (石英・長石少なく、 雲母・チャート多い。)
15-18 図版 8	第1拡張区 3層	陶器 播鉢	—	—		口径 24.2cm (残存1/16からの回転復元) ・ 外面 ヨコナデ後、2条の凹線(2条/cm)を施す。 ・ 内面 ヨコナデ。 ・ 外面 ヨコナデ。 ・ 内面 ヨコナデ後、櫛描き播目(5条/cm)を施す。	赤褐色	L M S       S S S 3 3 3 0 3 0	M   S				搬入品 (チャート多い。)

(古式土師器以外の遺物)

挿 お よ び 図 版 番 号	遺 層 位	構 位	器 種	口 縁 部	底 部	高 台	法 量 と 調 整	調 色	胎						備 考				
									石	長 角 閃 石	雲 母	チャ イト	赤 色 斑 粒	そ の 他					
15-19 図版8	第1拵張区 溝埋土		小形 土師皿B	皿口縁II	皿底部A		口径 8.8cm ・外 面 ヨコナデ。 ・内 面 ヨコナデ。 ・外 面 指頭による押圧後、不定方向のナデ。 ・内 面 ヨコナデ。	淡褐色	L	S	S	S							
15-21 図版9	第2拵張区 2層		小形 土師皿A	皿口縁I	皿底部A		口径 9.6cm ・外 面 ヨコナデ。 ・内 面 ヨコナデ。 ・外 面 指頭による押圧後、不定方向のナデ。 ・内 面 ヨコナデ。	淡褐色	①	S	M	S						搬入品 (長石が多い。角閃 石・石英大形のも の含む。)	
15-22 図版8	第2拵張区 2層		小形 土師皿C	皿口縁I	皿底部A?		口径 8.0cm ・外 面 ヨコナデ。 ・内 面 ヨコナデ。 ・外 面 指頭による押圧後、不定方向のナデ。 ・内 面 ヨコナデ。	淡褐色	M	M	S	S							
15-23 図版9	第2拵張区 2層		小形 土師皿B	皿口縁II	皿底部A		口径 9.8cm ・外 面 ヨコナデ。 ・内 面 ヨコナデ。 ・外 面 指頭による押圧後、粗い不定方向の ナデ。 ・内 面 ヨコナデ。	淡褐色	①	L	S	S	S						搬入品 (チャートややめ だつ。)

18-41 図版9	第3 Tr. 3層	瓦器碗	碗口縁 C	—	口径 14.6cm (残存1/10からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、粗いヘラミガキ (幅1mm)。 内面 ヨコナデ後、やや粗いヘラミガキ。 ・外面 指頭による押圧後、粗いヘラミガキ。 内面 やや粗いヘラミガキ。	黒灰色	S 1 M 1 S 1 S 2 S 0 S 0			搬入品 (雲母やややめだつ。)
18-42 図版9	第4 Tr. 床土・地山 上面	小形 土師皿D	皿口縁 II	皿底部 A	口径 10.3cm (残存1/6からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 指頭による押圧後、粗い不定方向の ナデ。黒斑。 内面 ヨコナデ。黒斑。	灰褐色	S 3 M 3 S 3 S 3 S 0 S 0			搬入品 (雲母やや多い。)
18-43 図版9	第4 Tr. 床土・地山 上面	小形 土師皿E	皿口縁 II	皿底部 D	口径 8.1cm (完形) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 指頭による押圧後、ヨコナデ。 内面 指頭による押圧後、粗い不定方向の ナデ。	赤褐色	④ L 1 S 1 S 3 S 3 S 4 S 0 S 0		花崗岩 (長径5 mm)	搬入品 (雲母大きく多い。)

(古式土師器以外の遺物)

挿 お よ び 図 版 号	遺 層 位	構 位	器 種	口 縁 部	底 部	高 台	法量と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	色 調	胎						備 考
									石 英	石 長	角 閃 石	雲 母	チ ャ ー ト	赤 色 斑 粒	
18-44 図版9	第4 Tr. 床土・地山 上面	小形 土師皿C	皿口縁 II	—			口径 10.3cm (残存1/8からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。 ・外面 指頭による押圧後、不定方向のナデ。 内面 ヨコナデ。	灰褐色	S M S M	S M S M	S M S M	S M S M	S M S M	M S	搬入土器 (雲母や多い。)
18-45 図版9	第4 Tr. 床土・地山 上面	瓦器釜	直口 A 型	—			口径 20.6cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ後、3条の凹線(2条/cm) を施す。 内面 ハケ(6条/cm)後、ヨコナデ。	黒灰色	L M S M	L M S M	S S S S	S S S S	S S S S	S S	搬入品 (角閃石やや少ない。チャートややめだつ。)
18-46 図版9	第4 Tr. 床土・地山 上面	須恵器 播鉢	播鉢口縁 F	—			口径 32.0cm (残存1/12からの回転復元) ・外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	淡灰色	M S M S	M S M S	S S S S	S S S S	S S S S	S S	搬入土器 (長石少なく、角閃石やや少ない。) 東播系



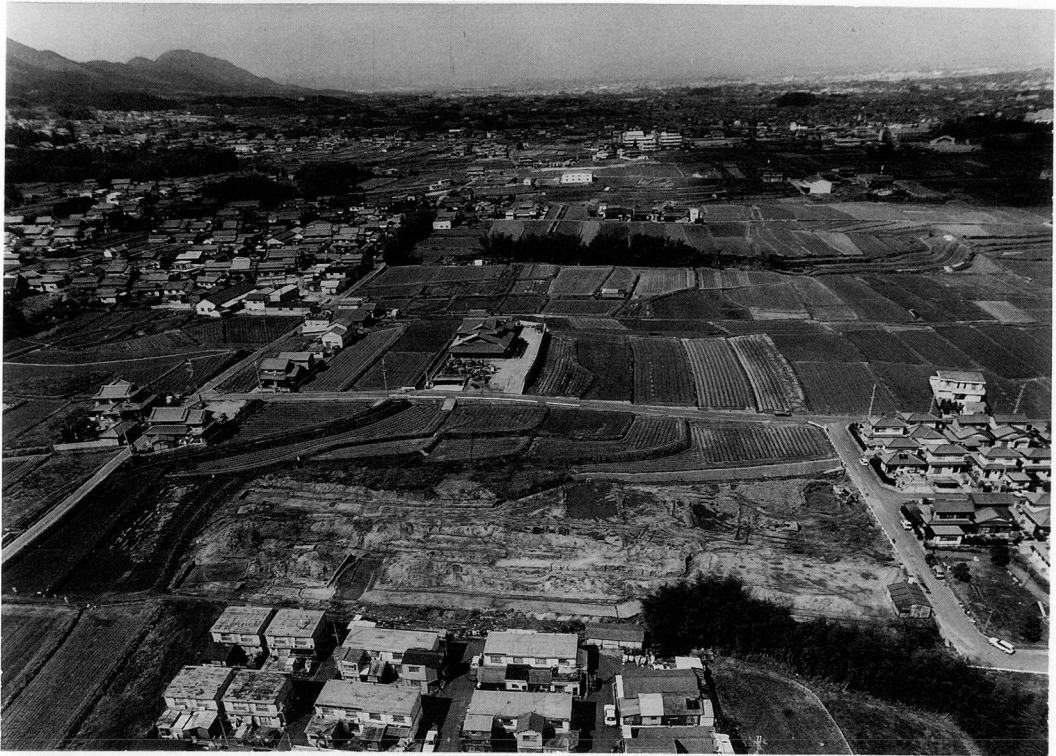
## 文献註・補註

- (1) 藤田和尊『橿原遺跡Ⅰ』（『御所市文化財調査報告書』第17集、1994年）
- (2) 宇野隆夫「井戸考」（『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』1989年）  
なお、本書では、「井桁」「井戸側」の呼称法は同書に従った。
- (3) 地元では、この種の井戸を「地獄井戸」と称すという。そしてその名の由来は、井戸底で掘削作業中に落盤が起こった時、天井がある部分に逃げると、生きて二度と地上に這い出る事ができないからだという。確かに多くの貯水量を得るために、まず縦穴を掘ってから横穴を掘るという工程を採るとそのような事故も起こりかねない。しかし、今回検出した井戸のような構造では、底での作業がすべて完了した時点で取水部分を狭くするので、そのような事故が実際に発生したとは考えにくい。このような構造は、事故防止のための一つの工夫かも知れない。また、今次調査地のように地山が粗砂で構成される軟らかい地盤である場合には、縦穴を掘ってから横穴を掘るという工法は、実際には不可能である。同様の効果を得ようとしたときには、検出したような構造、すなわち工法によらざるを得なかったものと思われる。
- (4) 寺沢薫編『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊、1986年）
- (5) 松本洋明編『十六面・薬王子遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第54冊、1988年）
- (6) 藤田和尊（前掲書（1）文献）
- (7) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻2号、1978年）
- (8) 森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」（『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』、1987年）
- (9) 毛利光用子「出土土器の年代」（『布留遺跡 布留（西小路）地区出土の中世土器』、『考古学調査研究中間報告』11、1985年）
- (10) 『矢部遺跡』では、土器の胎土中に含まれる鉱物の大きさ・量について各5段階の基準が設定されている。本書もこれに基づいて観察表に記したので、以下にこの基準を転載する。  
鉱物の大きさ  
①＝肉眼観察でも径1.0%以上の砂粒として観察できるもので、スコープ内ではその多くを占める巨大な塊と見られるもの。  
L＝肉眼観察では径1.0%前後に確認できるもので、スコープ内では大きな塊として見られるもの。  
M＝肉眼観察において径0.5%程度に確認できるもので、スコープ内では大きな粒子として確実に観察されるもの。  
S＝肉眼では殆ど判明できないが、スコープでは小さな粒子として十分観察しうる。  
⑤＝肉眼では全く分からない。スコープではピンホール程度にかすかに観察できる。  
鉱物の量  
0＝観察では全く確認できなかったか、殆ど存在しないに等しい。  
1＝極めて稀少であり、スコープ内に入らないこともままある。点在。  
2＝少ない。スコープ内には必ず入ってくるが、その量は数えられる程度である。散在しない偏在。  
3＝スコープ内には必ず入り、数えられる量ではない。普遍的に認められるが、間隔は粗である。  
4＝多い。スコープ内に際立って目立つ存在である。普遍的に認められ、その間隔は密である。  
5＝極めて多量である。スコープ全面に密集してみられる。鉱物が互いに接するものもある程である。
- (11) 藤田和尊（前掲書（1）文献、90～91頁）
- (12) 藤田和尊（前掲書（1）文献、96頁）

## 報告書抄録

ふりがな	ならばらいせき 2							
書名	檜原遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	木許守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-22 奈良県御所市三室117番地 TEL 07456-2-3001(内412)							
発行年月日	西暦 1994年11月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
檜原	奈良県御所市 大字檜原	29208		34度 27分 15秒	135度 43分 36秒	19940202~ 19940316	1,250	宅地造成事業（小集落地区改良事業）に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
檜原	集落	古墳時代 前期	河道	1	土師器		今次調査地に関しては多くの部分が谷地形に相当することが判った。	
		中世	溝	1	土師器			

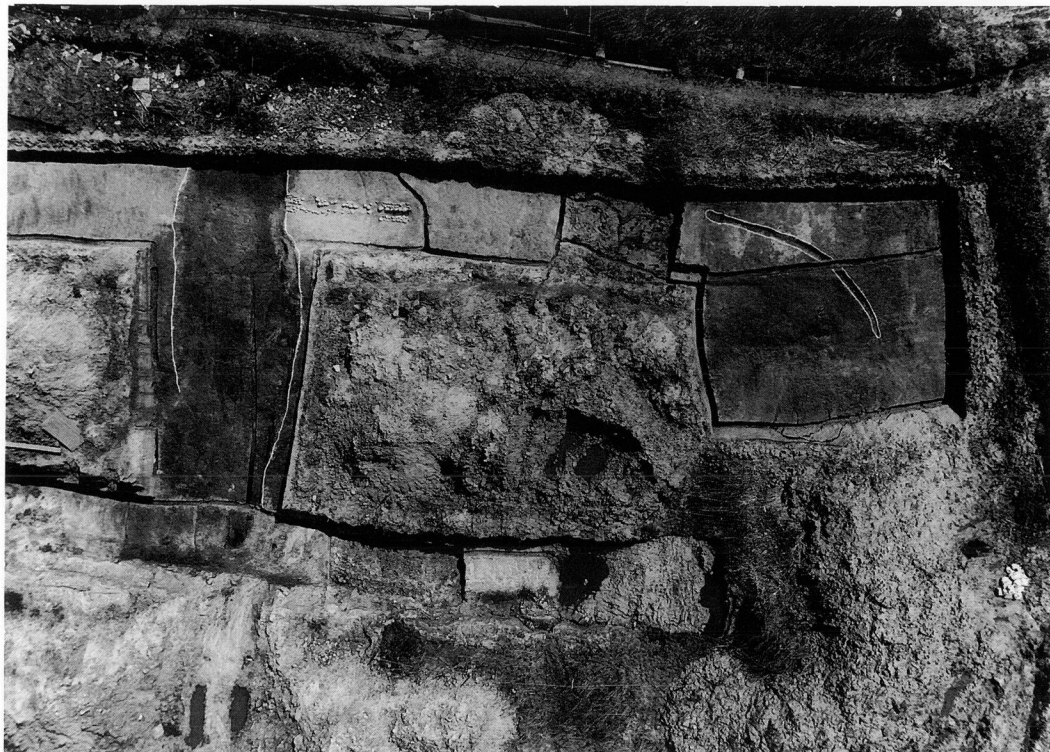
# 圖 版



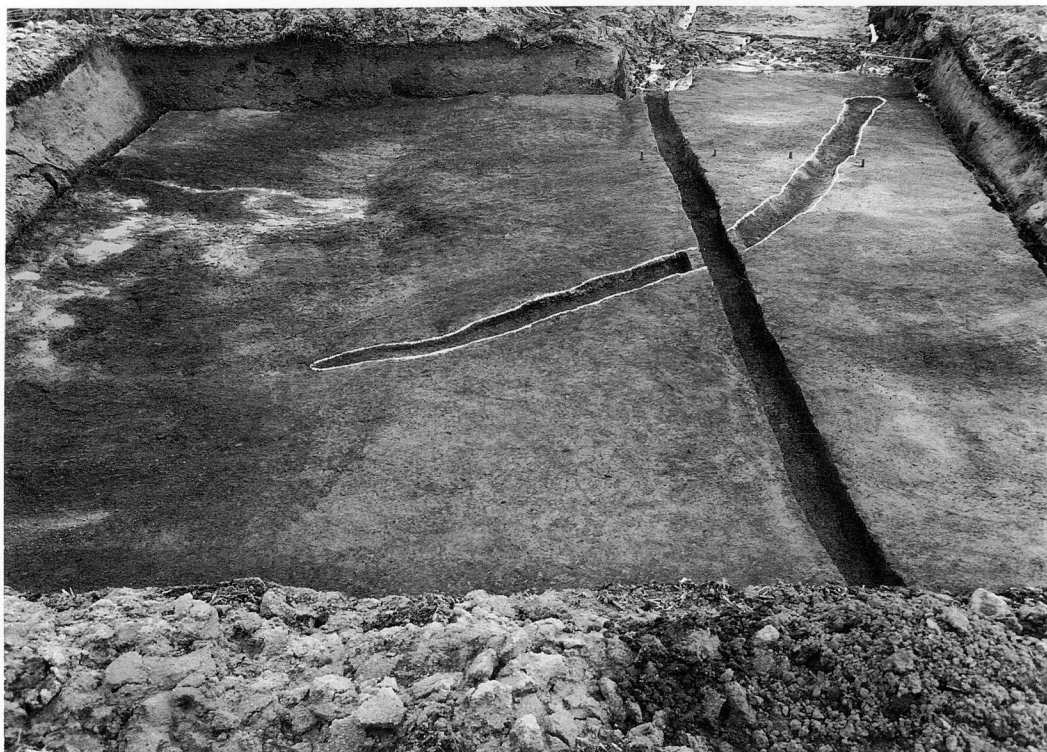
調査地全景（南から）



調査地全景（真上から）

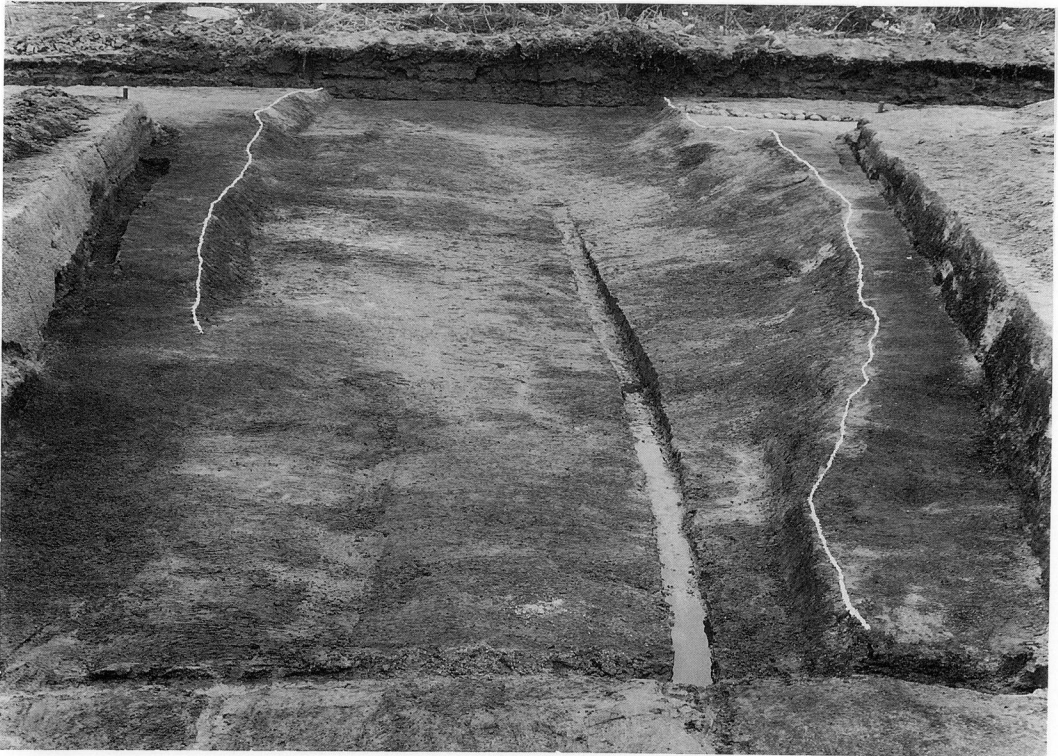


第1 拡張区・第2 拡張区（真上から）



第1 拡張区（西から）





第2拡張区（北から）



第1トレンチ（西から）



第2トレンチ（西から）



第3トレンチ（東から）



第4トレンチ (東から)



第5トレンチ

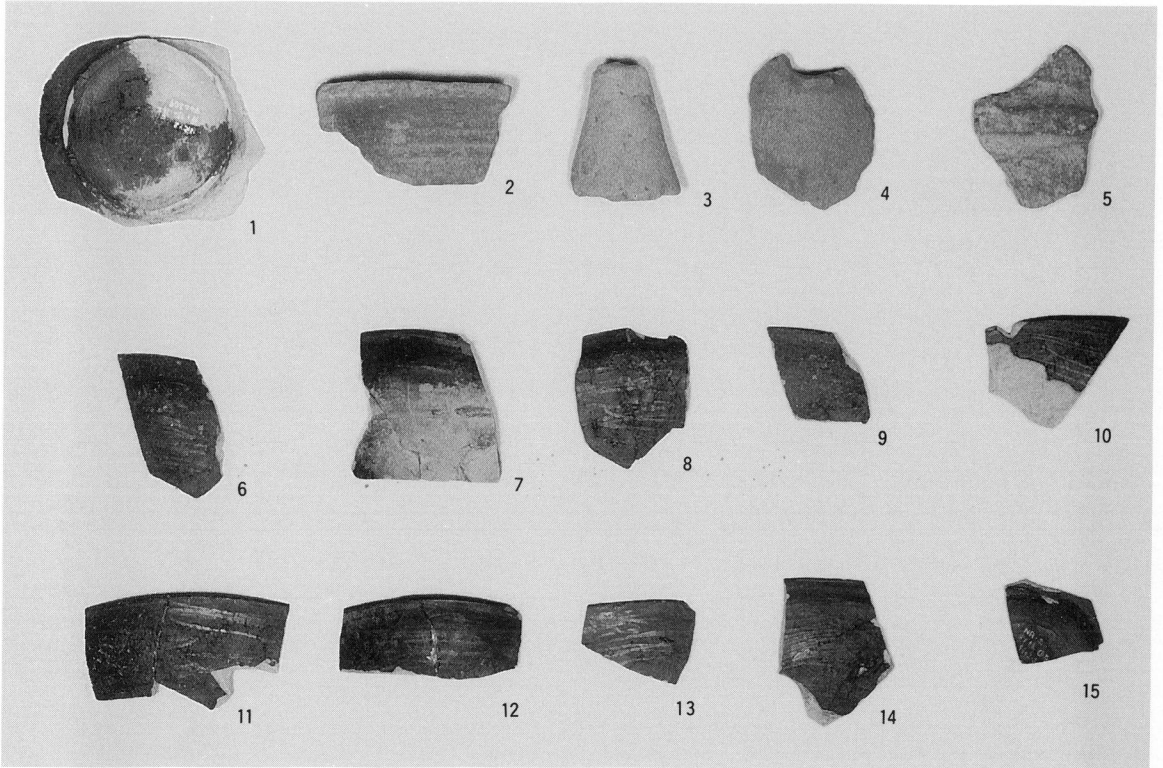




第4トレンチ 井戸（井桁）



第4トレンチ 井戸（井戸側）

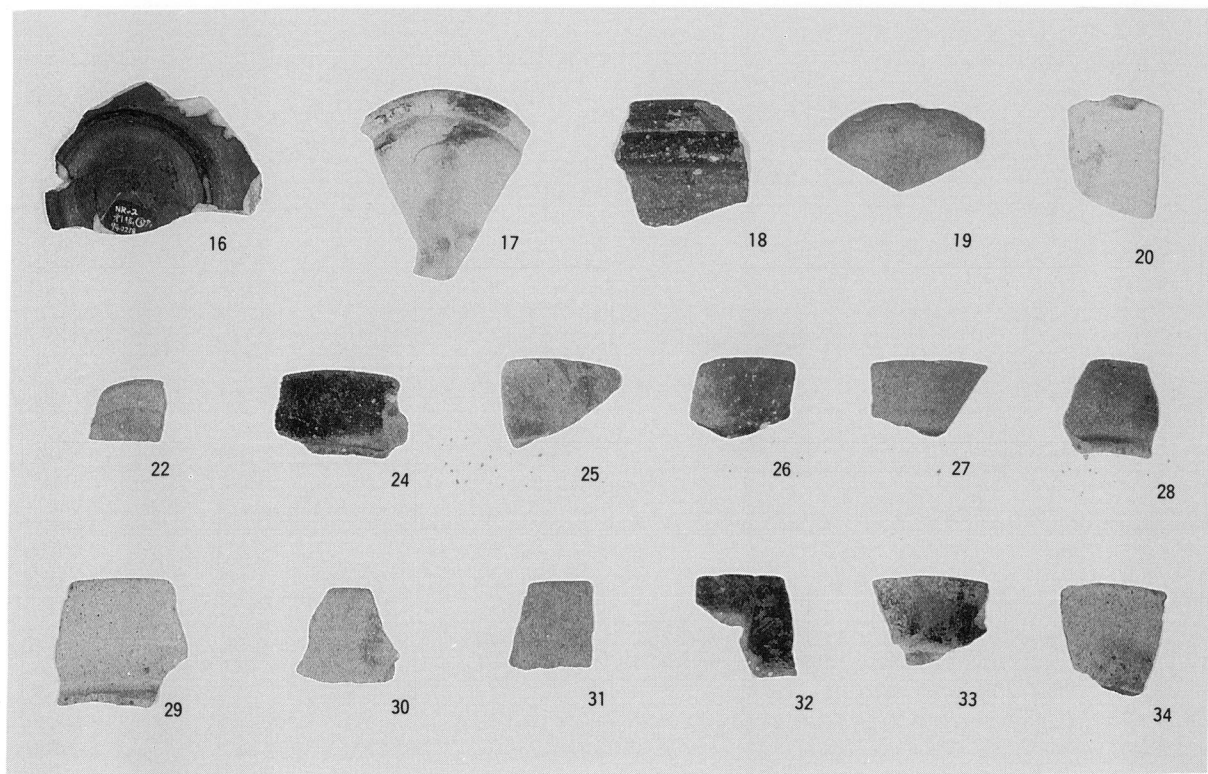


(外面)



出土遺物 1 (S. ≒ 1 / 3)

(内面)



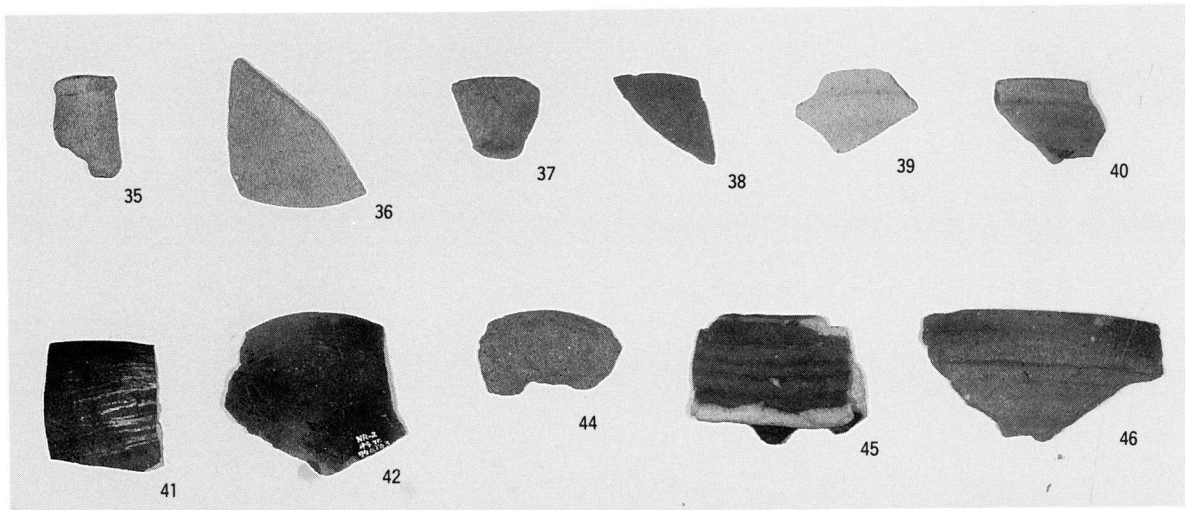
(外面)



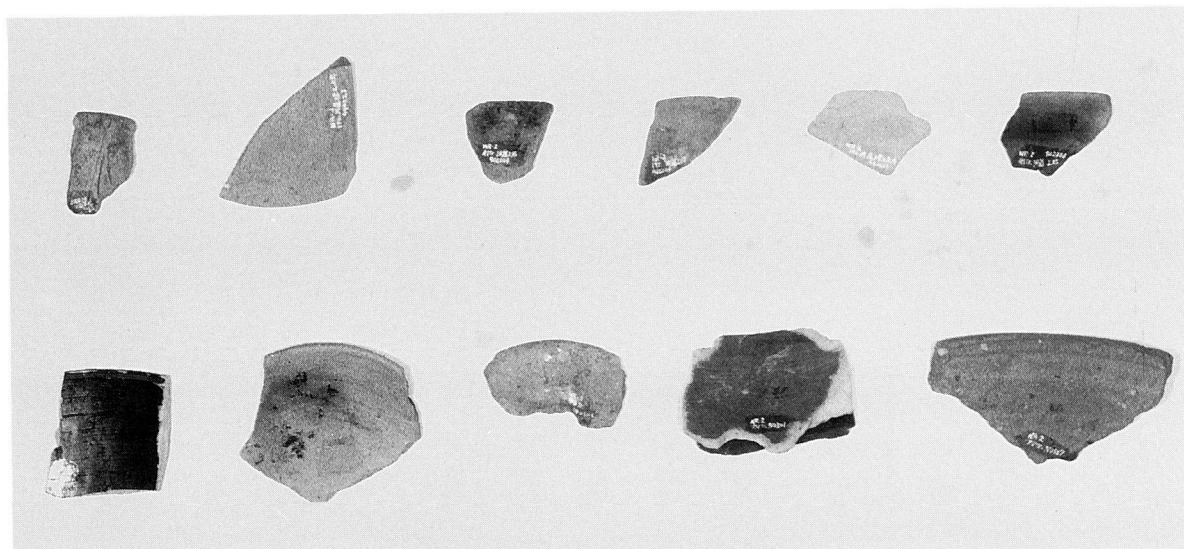
出土遺物 2 (S. ≒ 1 / 3)

(内面)

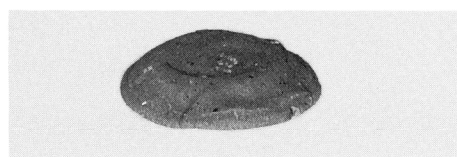
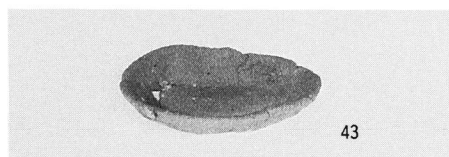
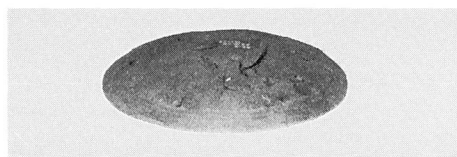
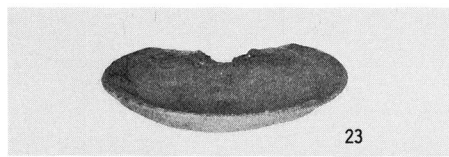
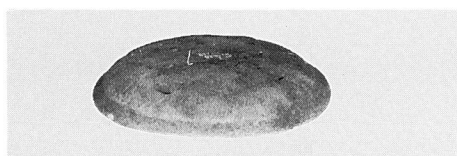
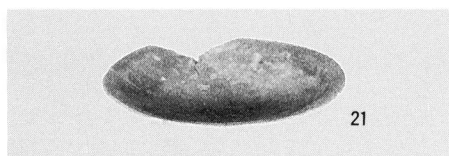




(外面)



(内面)



出土遺物 3 (S. ≒ 1 / 3)

奈良県御所市

# 檜原遺跡Ⅱ

御所市文化財調査報告書 第18集

平成6年(1994年)11月1日

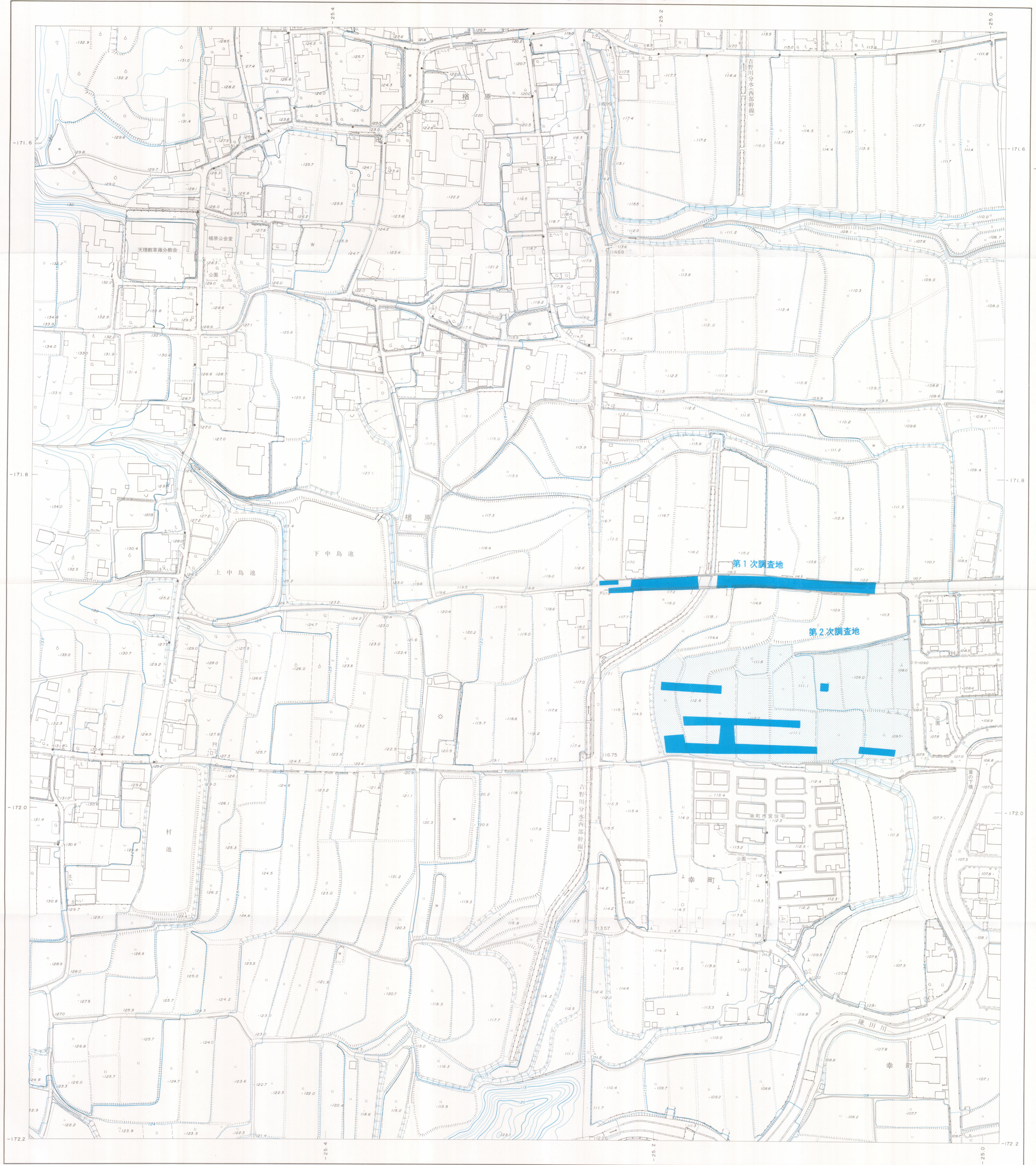
編集・発行 御所市教育委員会  
御所市三室117番地

印刷 (株) 笹田印刷所  
御所市今住16-3

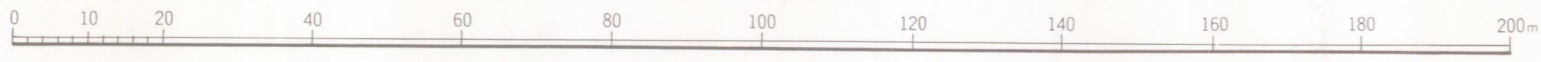
奈良女子大学附属図書館



# 檜原遺跡 地形と調査地位置



1:1,000



座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定  
 による第Ⅵ座標系  
 投影は横メルカトル図法  
 図面に表示してある座標値はキロメートル単位  
 万単位は0.1キロメートル間隔  
 高さの基準は東京湾の平均海面  
 等高線の間隔は1メートル